

この説は
成り立ち
がたい

較はできない。表象とその対象との比較である、と私らが思つてゐるのは、實は直接の表象と
間接の表象との比較である。いまペンの表象についてみるに、私らはペンを見ないときも、そ
のペンの表象をもつ。それとまた一つは、ペンを直接に體驗してをるときにも表象をもつ。前
者は間接の表象であり、後者は直接の表象「いひかへれば知覺象」である。この二つを私らは
比較して、その間の一致不一致を知ることが出来るけれども、知覺とその対象それ自らとの比
較はできない。そこで超越説は成り立ちがたい。といはれる。

そこで眞理は心のうちにある、との内在説が起る。

二 内在的眞理

これに二つを區別しうる。一つはなほ表象の根源としての實在物を想ふものであり、一つは
その如き實在物をまつたく無いとみ、在るものは私らの表象「すなはち觀念」のみである。と
みるものである。

内在説

すなはち前者は、直接體驗の表象と間接の表象との一致を眞理であるとみる説である。こ
の説は、対象それ自らなるものが直接に眞理の標準であるとはみない。けれども、二つの表象
が一致調和するのは、その表象の背後に共通の対象があるのだ、と想うてをる。たとへば、私

觀念相互
調和説

らが自然科学に於て作る表象は、經驗からえられた表象と、一致せねばならぬ。それらが一致
するときはじめて、そこに眞理がある。しかしそうした一致を想ふことの背後には、それら二
つの表象はある同一の實在物が心に呈示されて生ずるのだ、といふ究極の假定がある。

しかし唯心論者觀念論者の考へに依れば、世界はすべて觀念、すなはち表象、のみである。
空の星があるのではない、その星の觀念が、表象があるのだ。彼は酒をのんだのではない、
酒といふ觀念をのんだのだ、とこう見れば、眞理は心以外の實在者とは何らの關係もたない
。従つて、眞理といふは觀念相互の調和である。すなはち、觀念が相互に調和して何の矛盾を
も起さなければ、それらの觀念はみな眞理なのである。

しかし、それでは私の星の觀念と彼の星の觀念との一致するのは、何故か。私が見ても花で
あり、彼が見ても花であるのは、何故か。たゞ觀念だけがあつて、その觀念を規定するものが
なかつたら、私と彼との觀念は、一致するはずがない。私の心の中だけに於てなら、觀念相互
の調和でよいが、私のほかに彼がある、君がある。すなはち私以外の主觀がある。しかもそれ
らの主觀は一樣に星の觀念をもち、酒の觀念をもつ。

すなはち多くの主觀が同一の觀念「すなはち表象」をもつ。それはいかにしてであるか。そ

ウインデルバントの形式的眞理

れを説明するために、新カント派の、たとへばウインデルバントは、やはり一種の對象を認め
る。しかし、この對象は生々の對象「實在」ではなくて、いはゞ心的に加工された對象
である。この對象あるが故に、そこに思惟の必然性があり、また従つて、普遍妥當性がある
いふ。諸表象のこの必然性 [Notwendigkeit] と普遍妥當性 [Allgemeingültigkeit] とが、彼れ
に依れば、眞理の最後のテストなのである。——ところが(彼およびリケルトらの)いふこ
ろの加工された對象——すなはち意識によつて作られた對象——といふは、彼らのいはゆる價
値です、いはゆる當爲^{ソレ}——不許不——です。」

註(一) 第三章三節第V項参照。

x

眞偽を分
つ標準
理想的な
もの
現實的な
もの

以上の説明からみるに、眞理の標準——あるひは眞偽を分つ標準——を、およそまた次の二
種にわけてみることが出来る。その一つは理想的——ないし觀念的——な標準であり、他の一
つは客觀的——ないし現實的——な標準です。(もつともこゝにいふ客觀的の意味は、私らの
哲學で決定された正しい意味ではなくて、普通のいはゆる客觀的の意味です。) 前者はおほく
理想主義者または觀念論者らの立てる標準であり、後者は唯物論者ないし素朴的實在論者らの

立てるそれです。

形而上的超越説の立てる神も、もとより理想的な存在です。その意味においてこれは前者の
種類に屬する。まへに形而上的超越説に對してあげられた認識論的超越説はすなはちこゝにの
べる後者の類です。そしてこの最も著名なものは科學者が(おそらくは無意識的に、そしてま
た無批判的に)もつてをるところの眞理觀です。

新カント
派の眞理
觀

ウインデルバントやリケルトらの眞理觀は、實はこの兩種の見解の中庸をとらうとしたもの
——あるひはこの兩種の見解を止揚して、すなはち否定しながらも高めてとりいれて、第三の
見解を作らうとしたもの——です。その意味においては、後にあきらかにするところの私らの
哲學の見解と同じもくろみである。しかし、彼らが客觀性をもつものとして打ち立てた價值「
または不許不」なるものも、實は(彼らのいふとほり)意識の産物である。といふかぎりにお
いてそれは結局客觀的ではありえない、それは依然として主觀的である。さればこそ彼らの説
は結局超越的觀念論であることになるのです。

もとより客觀的が、中世的な意味での(主觀的に對する)客觀的である必要はない。私らが
すでに明かにしたところでは、主觀と客觀は、究極の地方においては一致する。すなはち低い

一、眞理に關する諸哲學の見解——形式的眞理

程度の主観客観を止揚した境の客観的で、それはあることを要する。ウィンデルバントらの努力ももとよりこゝにあるだらうと思はれるが、それは私らのほどに徹底的でなく、根本的でない。それゆゑにつまりは観念的な眞理観になつたのであらう。

x

プラグマ
ティズム
の眞理観

またこゝにプラグマティズムの眞理観がある。デュイムズによると眞理性はつまり立證性である。私らの經驗——または生活——上においてたゞしいと立證されうる觀念が正しい觀念である。觀念と實在物との一致が眞理性であるといへるなら、その實在物といふはつまり私らの經驗そのものである。そこで眞理は生活を指導するもの、生活に有用なものである、つまり眞理ははたらきである、そしてそれは作られるものである、等々のいはゆるプラグマティズム獨特の眞理観があることになる。デュイイの眞理説もまたこの類のものである。デュイイによると、觀念もまたもとより私らの經驗の一部であるが、この觀念が私らを導いて私らの經驗の他の諸部分と満足な關係をもたせるならば、その程度に應じてその觀念は眞理である、とされます。眞理としての觀念はつまり私らの經驗をよく導く道具であるとみられるゆゑに、デュイイの眞理説はまた特にインスツルメンタリズムといはれます。いづれにしてもプラグマティズ

インスツ
ルメンタ
リズム

ムの眞理は人間生活への實踐的效果を重くみる。いまプラグマティズムがよくひく例をひいて、プラグマティズムの眞理の性質をあきらかにしよう。

註(一) *verifiability, verification, validation*

註(二) *instrumentalism, 道具主義*。——たゞしこの道インスツルメント 具はあへて實用的道具ではない。それはアリストテレス

やメイコンのオルガノンの香をもつことばである、とデュイイ自身がいつてをる。——永野著デュイイ研究第三卷「論理學說の研究」三〇六頁以下參照。『The very word is redolent of an Organon whether norm or criterion.』(Experimental Logic, p. 332)

いま森のなかで途にまよつた。(とするとこゝにまづ當惑疑問問題がある。こうした立場をデュイイは「分岐路的立場」といふ。)そこでどうすればこの森から出て家路につけるかを種々考慮する、方角や地形やその他の諸事情によつて。そしてそこに一つの解決案「觀念」をつくる。次にこの案を實行したならばはたして迷はずに家路につくことができた。とすると、はじめの解決案は正しかつた、眞理であつた、ことになる。しかしその案で成功しなかつたならば、それは正しくなかつたのだ、眞理でなかつたのだ。といふことになつて、さらに新らしい案がたてられる。そしてその眞價はまた實際の立證によつて定められることになる。デュイ

一、眞理に關する諸哲學の見解—プラグマティズム

イはこうした過程をさらに五段にわけ、實際の日常経験や科學的経験を例にとりながら、詳細な説明をしてをる。³⁾——こうした實例の説明はもとよりたゞ理解を容易にするための説明であります。

註(一) forked-road situation.

註(二) 「デューイ論理學說の研究」第八章参照。

眞理はオルガノン

右の例ははなはだ形而下的ではあるが、そのなかから、眞理はつまりははたらきであること、オルガノンであること、つくられるものであること、生活の指導者であること、等々のプラグマティズムの特徴が充分にわかるでせう。

新カント派とプラグマティズムの一致点
致點差異

新カント派の眞理觀とプラグマティズムのそれとは、ともに在來の主觀的「觀念的」標準または客觀的「實在的」標準から自由になつて、さらに一段と高い眞理的標準をえようと努める點で一致してをる。しかし、そうはいふものの新カント派のそれが比較的觀念的であり、プラグマティズムのそれが、比較的實在的であることは、あらそはれない。また新カント派の標準がやゝ靜的であるに對して、プラグマティズムのそれははるかに動的である。——私らもこの二者とともに、さらに妥當な眞理的標準を認めようとする。それははなはだ動的であるといふ

意味において、新カント派のそれによりも、より多くプラグマティズムのそれに、ちかひ。しかし眞理の見解にかぎらず、すべてがより多く形而上的説明になる點においては、プラグマティズムとはなはだことなつてをる。

二、純粹經驗の假說からみた

眞理の解釋

以上の諸説は。——(新カント派やプラグマティズムの見解はやゝ別としても)——いづれも心とか物とかにこだわつてをる。けれども私らに依れば、心とか物とかは私らの經驗が生長してのちに、はじめて作り出されたものである。私らが最初にもつものは、物でもなければ心でもない。たゞ何かそこにあるだけである。それはたゞのそれである、いひかへれば、純粹經驗である。この純粹經驗が生長してゆくにつれて、自他の意識も生れ、あれは物であり、これは心である、などの見方も生じたのである。しかも、その物といひ、その心といふは、何れも經驗であるにすぎない。思考の發達した私らは、(その私らは諸經驗の一統體であるが)、ある種の經驗をば物といひ、ある種の經驗をば心といふやうになつたのである。そして、私ら

純粹經驗からすれば生れる

二、純粹經驗の假說から見た眞理の解釋

は経験以外に、もののあることを知らない。そこで、眞理の何物であるかは、この経験の限りに於て、説かれねばならぬ。物も心もみな私たちの経験である。この如くみれば、上の諸説の説明では、私らは安心ができない。

物や心、内界や外界等、は後の産物であるからには、もつとも根柢から考へられねばならぬ眞理の性質を、物や心を假定するところから、考へはじめてはならぬ。私らはもつとも最初の、そして究極の、それから考へはじめねばならぬ。

「私」なるものの最初はたゞのそれである、私は、もつともはじめには、赤兒ではなかつたのだ、また二つの生殖細胞でもなかつたのだ。たゞそれといふ経験であつたのだ。それが生長してのち、はじめてかつて赤兒であつたことを想ひ、または、かつて両親の体内に於ける二個の生殖細胞であつたことを想ふのみだ。けれども、私は新しい一人の人の生れたとき、その人を赤兒といふではないか、また、その赤兒のもつと最初は細胞であつたことを信ずるではないか、そして私はその人を、それとはいはずに、赤兒といふではないか、または二つの生殖細胞といふではないか。それならば、その最初を、それとか純粹経験とか呼ばずに、赤兒とか細胞とかいうたらどうだ。といふ疑問が起るかも知れぬ。しかし、それを赤兒といひ細胞と

私のはじめ

いふことは、後の知識を最初の位置に、くるりともつてきて、そこから出發しようとしてゐるのである。もし赤兒といひ細胞といふならば、それは、まさにはじめべきはじめではない。はじめと思ふのはあやまりで、それは終りである。私らはなるべく、終點から始點へいくことをさけるべきであらう。

そこで、私の最初も赤兒でも細胞でもなくて、たゞのそれである。このそれがだんだん生長して今の私になつた。ところが、私がつたゞのそれであるあひだは、私には眞もなければ偽もない。しかし、それなる純粹経験は刻々に生長し、やがてそこに経験の統體ができて、思ひ考へるはたらきをするやうになる。たとへばたびたび母から乳をあたへられてをると、母は乳をのませるものだを知る。そして母を見れば乳を要求する。ところが、まだ経験が充分に生長してゐないところの、ほんの赤兒であるあひだは、母らしい女を見ても、同様に乳を要求する、(泣きなどして)。ところが母らしくとも母でない人は乳をあたへてくれない。そこで赤兒は問題にぶつかる。この問題といふは何であらう。と考へてみれば、これはなめらかに流れてゐた経験のうける障害である。泣いたり、あるひは笑んだり、あるひは體を勇ませたりして、乳を要求すれば、實の母はたゞちに乳をあたへてくれる。すなはち要求する経験と受ける経験は、聲

経験統體への生長

眞偽のは
じまり

とその山びこのやうに、すぐに應へあうてゐた。いひかへれば、そこにはなめらかな経験の流れがあつた。それだのにいま母らしいしかし母ではないその人からは、要求してもあたへられない。こゝに経験の障害がある。この障害がすなはち問題である。赤兒はしばらくのあひだは、この問題をたゞ問題として感じ、そこに困惑を経験するだけであらうが、しばらくすると、母と母らしいが母でない人と、を見知り、そして母に要求すればあたへられることを知り、母以外に要求すればあたへられぬことを知る。(この知るといふことはいはゆる知識的でなくて、體驗的に知るのであつても、さしつかへない。體驗的に知ること、つまりは知ることである。) いま彼は母以外の人に要求した。そしてあたへられなかつた。としたならば、このとき、彼は自分の要求したことのあやまりであつたことを知る。この程度に達したとき、赤兒ははじめ、眞と偽との経験をもち、そして私らは知る。眞理の経験はなめらかながれ、偽の経験はなめらかでなくて、不和を生ずることを。偽の経験を、演繹および歸納の論理學に於て、私らは「誤謬」とよんでをる。もし誤謬の字が言葉のみのごとく見えるならば「虚偽」の字を用ひるがよいであらう。

眞理と虚
偽

絶対眞理

またそれなる純粹経験も、なめらかに流れる経験である故に、やはり一種の眞理と見られて

生長した
経験統體
に於ける
虚偽

、よからう。しかし、純粹経験はまだ眞とも偽ともつかぬ経験、いひかへれば、眞偽を超越した経験であるから、私らはこれを絶対眞理とよべよからう。

私らはこのことを、かなりに生長した経験統體としての私らについても、みる事ができる。白い花をみて、たゞそれをそれとしてみるかぎりでは、そこには眞も偽もない。いひかへればそれは絶対眞理である。ところがそれをふりかへりみて「それは白い花だ」とするときは、私らはその経験をあるひは眞理であるとし、あるひは誤謬であるとする事ができる。その「白い花」のそばへ近づいてみて、はたしてそれが白い花であつたら、その「それは白い花だ」といふ経験は眞理である。ところが、それは白い花ではなくて、白い葉であつたとすれば、その「それは白い花だ」の経験は誤謬または虚偽であつたのである。

眞理のテ
スト

白い葉をみて白い花だと知る経験も、その経験の限りに於ては、なめらかに流れる経験、すなはち純粹経験である。従つてその経験の限りに於ては、それは絶対眞理である。(絶対眞理は、そこで絶対虚偽でもある。) それが虚偽となるのは、他の経験と不和を生ずるに於てある。こゝでは、近くへよつてみると、それは経験と不和をもつてをる。

そこで私はいふ。経験の諧調 [melodia, harmonia, concordia] が眞理である、すなはち眞

通常経験
の眞理

理のテストは、その経験が他の諸経験と何らの不和をもたずにはたらくことである。

笛、太鼓、小鼓、つゞみに三味線に、それにあはせた長唄に、あはせて踊る踊り子の、手拍子足拍子心の拍子——それらがみんな調和して、流れて運ぶ経験に、一つとして眞理でないものはない。それはみんな眞理だ、絶対の眞理だ。しかし、たとさしのべた指さきが、心もち調子にはづれても、そこには経験の不和がある。それは誤謬だ、虚偽だ。前後左右の釣り合ひをなめらかにとつて、わたりゆく綱わたりの軽業師の経験に誤謬はない。もしあれば地におちる、そこに経験の不和がある。さつさと飛んでゆく空の鳥の経験に、誤謬はない。しかし、行く手の白壁に嘴をつきつけて、死んで落ちることの中には、誤謬がなければならぬ。かれは白い壁を明るい空間とまちがへたのである。ころころとあるいてゆく経験に誤謬はない。しかし、急にひくい所をふんで、びつくりする不和な経験のなかには、誤謬がなければならぬ。私らはそのひくい地を、平地と思ひちがへたのである。ドードレ、ミーミファ、ソーソラ、ソとキーをうつつゆくに、ドードレ、ミーミファ、ソーソラ、ソと音がでるなら、そこに誤謬はない。しかしどれかの音がちがつてゐたら、そこにはきつと誤謬があるにちがひない、私らにか、ピアノにか。あまいと思つてくつた柿が、はたしてあまいなら、そこに誤謬はない。

掘れば黄金が出ると思つた、ところが掘つたあとには、茶わんのかけらが、ざくざくと出た、こゝに誤謬がある。

科學的眞理

つぎに、科學的眞理の標準となる経験の諧調は、観察実験等の諸経験との一致を、特に重んずる。水は H_2O であるとするならば、 H_2 と O とを合せて水とするか、また水を H_2 と O とに分析するか、の實驗が可能でなければならぬ。この實驗「観察または」の可能でないものは、科學に於ける普通の意味での假説である。この假説は観察実験等の諸経験とは諧調するみちを、それが假説である限りに於ては、もたない。けれども、そうした直接経験以外の諸経験「すなはち他の諸眞理や諸推理」とは諧調をもつ。

そして、科學的眞理の諧調はいつでもどこでも、「いひかへればどんな経験とでも」、かならず諧調をもちうる可能性を、極度にもつたものであらねばならぬ。すなはち、その諧調は、すでに述べた自然の齊一律または因果律の諧調であらねばならぬ。この諧調を、あるひは普遍妥當性といつてもよい。しかし自然の齊一律、また因果律が、すでに假說的眞理である故に、科學的眞理といへども、永遠に固定した頑固なものではあられない。あまいと思つて食つた柿の甘かつたといふ状態「場」の中に於ける眞理としての「この柿は甘い」は、まづこの状態の

限りに於ての眞理であるとみられてもよい。しかし科學的眞理としての「水は酸素と水素の化合物だ」といふ眞理は、この水にも、あの水にも、去年の水にも、來年の水にも、北極の水にも、熱帯の水にもあまねく通用する。すなはち、この眞理は普遍妥當性をもつてをる。しかしこの普遍妥當性は、その眞理の適用される状態が極度に廣がつたことを告げるのみである。まへの眞理は一經驗を状態としたに對して、のちのこの眞理は科學を状態としてをる。前の場合には、その具體經驗が變れば眞理が變るであらうやうに、後の場合には、科學が變ればその眞理が變りうるのである。普遍妥當性は絶對の普遍妥當性でない、それはその状態の限りに於てのものである。

數學的眞理

數學的の眞理は、まつたく實際的の經驗に關係をもたぬごとく思はれてをるが、これはあやまりである。

いかにも幾何學の考へるやうな大きさも重さもなくて、たゞ位置だけをもつ點なるものは、經驗的具體物としてはないであらう。長さだけあつて厚さも幅もないやうな線も、經驗的具體物としてはないであらう。だが、さういふならば、白馬は馬にあらず式に考へられて、世に馬はなく、人はなく、花はない。あるのはこの馬、この人、この花のみである。この馬、この人、

それはまつたく抽象的ではない

この花などの特殊の經驗的具體物から、私らは馬を考へ、人を考へ、花を考へてをる。點や、線や、また面や、立方體や、圓錐形やも、同様にしてつくられた抽象經驗である。私らは・の經驗をもつ。空の一點、地の一點、鼻の一點、心のこの一點（これは幾何學には關係ないが）、等々の經驗をもつ。これらの經驗から、私らは點を考へたのである。線も面もその他も同様である。そして「人は死ぬ」といふ眞理が、個々の人の死にあてがはれるやうに、「直角三角形の斜邊の自乗は、他の二邊のそれぞれの自乗の和に等しい」といふ眞理は、紙に描かれた直角三角形や、地に描かれた直角三角形に就いて、適用されねばならない。もともと幾何學の原語の Geometry は、地を測る學の意味である。現にいまのべたピタゴラス (Pythagoras 紀元前六世紀の人) の定義なども、一説に依れば、風呂場の敷石の様から暗示されたものだ、といはれるくらいである。代數の眞理にしてもまづ事實から出發する、そして、一度はまつたく抽象的の形をとるが、やがてまたそれは事實に歸つてくることを必要とする。代數で一つの問題を解くに、まづ具體の數を a, b 等の符號であらして仕事をして、次にさうして得られた結果に、また具體の數をあてがふ。もし $(a+b)^2 = a^2 + 2ab + b^2$ が具體の數また量の經驗にあはなかつたら、もとよりこれは眞理でありえないのである。さらにいふ人があるであらう——「一

、二、三の數や、また一リットル二リットル等の量は、抽象經驗であつて、具體の經驗ではない」と。いかにもその通りである。しかし、具體といひ抽象といふも、程度に依つての差別である。代數の符號に對しては、しかじかの數量は具體經驗である。しかし、この數量に對しては、さらに具體の柿の三、桃の三、水の一リットル、黄金の一グラム等の經驗がある。すなはち、これらのさらに具體の經驗に對すれば、數量は抽象の經驗である。そこで代數の眞理は、一應は具體の數に、さらには具體諸物の經驗に、歸つてくる。

ところがこゝに「 $\sqrt{-1}$ 」とか、「 $\sqrt{2}$ 」とか、さらには「 $\sqrt{-1}$ 」などの特殊な抽象的の數がある。そして「 $\sqrt{-1}$ 」は、一足らぬ經驗、「 $\sqrt{2}$ 」は、たとへば總面積二平方メートルの正方形の一邊の長さの經驗とすれば、説明がつく。しかし、「 $\sqrt{-1}$ 」はなんであらう。いかにも、これにあたる事實(具體經驗)はちよつとみあたらずである。しかし、それもまつたく事實と無關係ではない。といふのは「1, 2, 3, ……」等の數は事實からの抽象であるが、私らは、前にもみた通り、さらに進んでこの「1, 2, 3, ……」等の數を、事實としてみることができる。この「1, 2, 3, ……」等およびその他の諸法則からして、私らは「 $\sqrt{-1}$ 」を引き出したのである。そしてまたこの「 $\sqrt{-1}$ 」をそれらの「1, 2, 3, ……」等に歸してゆくことができる。

$\sqrt{-1}$
の眞理

たとへば「 $\sqrt{-1}$ 」×「 $\sqrt{-1}$ 」であるから「 $\sqrt{-1}$ 」×「 $\sqrt{-1}$ 」×「 $\sqrt{-1}$ 」×「 $\sqrt{-1}$ 」である。こゝに私らは「 $\sqrt{-1}$ 」なる數をえた。またこの逆も可能である。そこでこの「 $\sqrt{-1}$ 」は算術ないし數學上の諸經驗「あるひは俗の言葉を用ひて諸觀念」との諧調をもつ。その意味に於て、またその場合に於ては「 $\sqrt{-1}$ 」は眞理である。」

註(一) $\sqrt{-1}$ は「 $\sqrt{-1}$ 」はゆる虚數 [Imaginary number] です。そしてこれはぐわんらい次のやうに二次方程式を解くにあつて新しく出た數であります。

一般にxの二次方程式は次のやうにあらはされる、

$$ax^2 + bx + c = 0 \dots\dots (1)$$

(1) 式をaで除すると

$$x^2 + \frac{b}{a}x + \frac{c}{a} = 0 \dots\dots (2)$$

(2) 式に $(\frac{b}{2a})^2 - (\frac{b}{2a})^2 = 0$ を加へると

$$x^2 + \frac{b}{a}x + (\frac{b}{2a})^2 - (\frac{b}{2a})^2 + \frac{c}{a} = 0$$

いま $\frac{b}{a} = 2A, \frac{b}{2a} = A$ でおきかへれば

二、純粹經驗の假説からみた眞理

$$x^2 + 2Ax + A^2 = \frac{b^2}{4a^2} - \frac{c}{a}$$

$$(x + A)^2 = \frac{b^2 - 4ac}{4a^2}$$

$$x + A = \pm \sqrt{\frac{b^2 - 4ac}{4a^2}}$$

$$\therefore x = -A \pm \sqrt{\frac{b^2 - 4ac}{4a^2}}$$

すなはち $(A = \frac{b}{2a} \text{ であるから})$

$$x = \frac{-b \pm \sqrt{b^2 - 4ac}}{2a} \dots\dots\dots (3)$$

(3) 式中の $\sqrt{b^2 - 4ac}$ について次の立場が考へられる。

- (i) $b^2 - 4ac > 0$
- (ii) $b^2 - 4ac = 0$
- (iii) $b^2 - 4ac < 0$

この (iii) の場合 すなはち $b^2 - 4ac$ が負数の場合をみるに、

$$b^2 - 4ac < 0$$

$$\therefore -(4ac - b^2) < 0$$

$$\therefore (4ac - b^2) > 0$$

いま $(4ac - b^2)$ を B でおきかへれば

$B > 0$ 即ち B は正数。

$$\therefore \sqrt{b^2 - 4ac} = \sqrt{-(4ac - b^2)}$$

$$= \sqrt{-B}$$

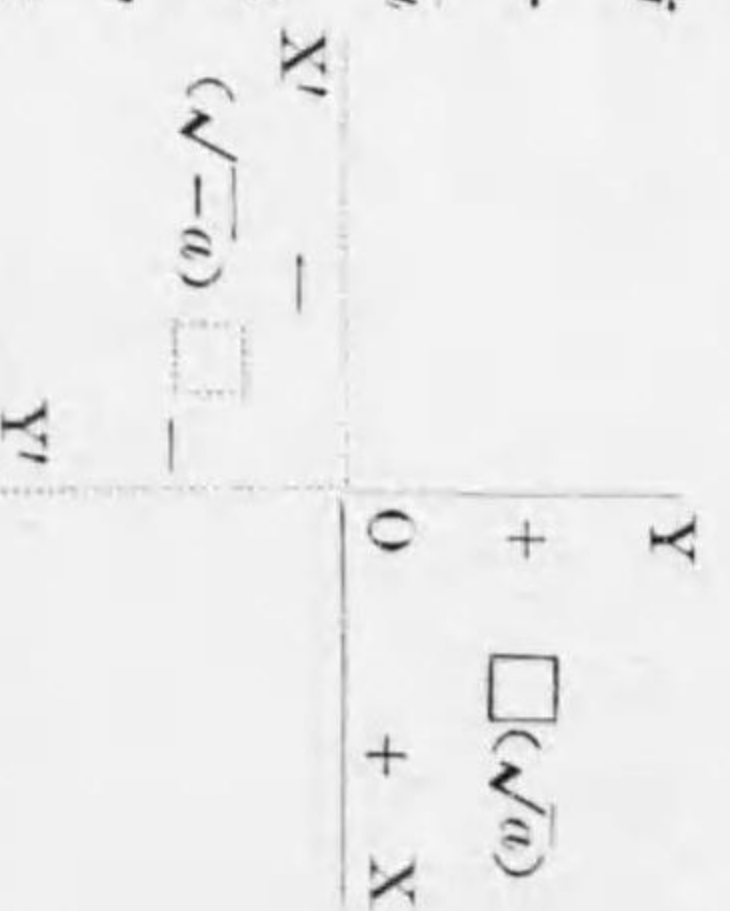
$$= \sqrt{-1 \times B}$$

$$= \sqrt{-1} \times \sqrt{B}$$

かくして「 $\sqrt{-1}$ 」が数の概念中に盛り込まれたわけですが。「 $\sqrt{-1}$ 」は虚数の単位です。この単位は（ドイツの學者ガウス [Gauss]）に發し「 i 」と記されることがあります。

註1) ある意味において $\sqrt{-1}$ が座標上に求められるのではあるまいか。圖において XOY は + の領域であり、X'O'Y' は - の領域である。この兩領域内の各正方形の絶対値を共に a とすると、□は (+a) であり、□は (-a) です。そして□の一邊の値は \sqrt{a} となり□の一邊の値は $\sqrt{-a}$ とみてよいでせう。ところが、 $\sqrt{-a} = \sqrt{a \times (-1)} = \sqrt{a} \times \sqrt{-1}$ です。ここで□と□との各邊の絶対値は同じだが、 $\sqrt{-1}$ 以後者は負の領域にある、そしてその事實が $\sqrt{-1}$ によつてあらはされてを、と考へられませう。こゝに $\sqrt{-1}$ の具體の意味のすくなくとも一例があるので

II' 乗法算の規則的な説明



はあるまいか。なほ $a=1$ ならば、 $\sqrt{1}$ の一辺の値は $\sqrt{1}$ 、 $\sqrt{-1} = \sqrt{-1}$ です。なほこの兩領域内の正負の値は、(正方形のそれとみず)、力の値などと考へてもよいでせう。

もしウィンデルバンツラにいはせれば、この $\sqrt{-1}$ 等は、思考の必然性からきたものであり、従つて普遍妥當性をもつといはれるであらう。しかしこの必然性も、普遍妥當性も、みな今日の數學といふ状態内に於てのみのことであつて、今日のそれとはなほ異なるつた形の數學に於ては、あるひは矛盾したものととなり、あるひは存在することができないかも知れぬ。その故は、眞理は私らに作られるものだからである。

さらにこれを説明するため一つの例をとらう。私らは算術に於て、分數を用ひないかぎり、一を三で割ることができなう。 $1 \div 3 = 0.3333 \dots$ となつて何年割り算を行なつても割りきれない。ところが私らは一本の直線を三つにわけるともでき、また一つの餅を三つにわけるともできる。三人で餅を一つもらつたとき、どうしたらよいでせう。同じやうに三つにわけなさい。いえ、一は三で割れません、ですから、一つの餅を三つにわけることはできないのです。とは誰もいはない。

さて、一が三で割きれぬといふことも、思考の必然性と普遍妥當性をもつてをる。それにか

一が三で
は
われぬの

はらず、一つの餅の三つにわけることを思へば、この必然性や普遍妥當性の通用しない状態も、ありうるはずである。十人の一組を三等分することはできない。すなはち、この場合には一(一組の一)を三等分できない。しかし、こゝに九人の一組を三等分することは、たゞちに行ける。すなはち、この場合には一を三等分できてをる。何故にこのやうな相違ができたかといへば、前の場合には十をひとみ、のちの場合には九をひとみてをるためである。一が三で割れないのは、私らが十進法の算術組織をもつてゐるためである。もし、私らの算術が九進法であつたら、一はたしかに三で割れるのである。十進法の状態に於ては、一は三で割れぬことが眞理である。けれども、九進法に於ては、それは誤謬である。前者には諧調があり、後者には諧調の反對の不和があるから。

さらにある人はこゝにいふかも知れない。——一つのもちが三つにわれるといふのはうそだ、私らはどのやうにたくみにわけても、三つがそれぞれ全く等しいやうに等分することはできない。また、九人の人を三人づゝにわけて、それでもつて九人を三等分しえたと思ふのは、まぢがひである、その九人の人は、それぞれ顔のかたちを異にし、身長や體重やそれから知識や感情なども、異にしてをるから、と。これはその通りである。そして、この如くみたときには

、そこに経験の不和があるので、九人を三等分し、もちを三等分することは、眞理でありえない。私らは、この不和を除くためには、その九人、またはそのもち、といふ生まの事實に加工せねばならない。たとへば、私らは九人の一人一人をば、それぞれ異なつてゐるにかゝらず、數として同一であるとする。しかし、私らは一人一人を數の一人としてよい場合とわるい場合とがある。わるい場合には、いふまでもなく九人を三等分することはできない。

科學の材料となる事實も加工されてをる

事實への加工は、この如き算術の場合だけでない。またさらに、代數學や、幾何學や、その他の諸數學の場合だけでもない。具體の諸経験について實驗的な證明をなすうるといふ科學、たとへば、物理學や化學、に於ても同様である。一メートルの長さ、一グラムの重さ等々、がなかなか事實には経験され難くて、いはゞ、つくられた概念であるのはもとより、落下する物體の速さや、運動量等も、決して、物理學の眞理としての法則の示す通りには、現はれて來ないのである。たゞその法則の示すところに、極めて近く現はれるにすぎない。

哲學的眞理

次に、哲學的の眞理についてみよう。哲學的の眞理は、生まの事實からもつとも遠くはなれたものである。科學的眞理や數學的の眞理も、もはや相當に事實からはなれてゐたけれども、その大部は、まだ實驗されうるものであつた。しかし、哲學的眞理には、この實驗があてがは

れがたい。

これを別の言葉でいふならば——、事實的の眞理は生まの事實で立證されるものであるが、科學的の眞理や、數學的の眞理は、加工された事實に依つて、立證される。殊に數學的の眞理には、もはや通常の意味では事實の名に依つてよばれることのできないほどに、加工された事實、「すなはち俗の言葉でいふ概念」、に依らねば證明のできないものが、たくさんある。哲學になれば、なほそれがはなはだし。

さらに、これを別の方面からみるならば、事實的眞理の通用 [validity] する範圍「すなはち状態」はきはめてせまい。が眞理が科學的になりゆくにつれて、その状態の大きさがだんだんましてゆく。數學的眞理の状態は科學的のそれよりも普通に大きい。ところが、哲學的の眞理の状態は、さらにさらに大きいのである。しかし、こゝに注意すべきことは、眞理の通用する範圍の大きくなるにつれて、その眞理の頑固さのうすらぎゆくことである。「事實は頑固だ」といふ言葉がある。いま太郎の笑つたのを見て「太郎はいま笑つた」といふとき、「太郎はいま笑つた」といふ眞理は、この小さい事實の限りに於ける眞理である。「このペンは書きにくい」といふ眞理も、この書きにくいペンの限りに於けるものである。そのかわりに、これらの眞理

眞理の適用される状態の廣まるにつれて眞理は頑固でなくなる

はいゆる事實であつて、頑固である。ところがすこし科學的の眞理になると、一般的になるかわりに、事實ほどに頑固ではない。いひかへれば、それにかわるべき他の眞理を、私らは、たまたま、つくりだせることができる。いかにも頑固に見えたニュートンの眞理も、アインシュタインの眞理に依つて、とつてかわられるのではあるまいか。エーテルの眞理などは、なほさら頑固さをかいでをる。空間の數學としての幾何學でも、ユークリッドの眞理が非ユークリッドの眞理にとつてかわられることができよう。哲學になれば、なほこれがひどい。哲學は、科學の科學であるとさへいはれるとほりに、哲學の眞理はもつとも一般的である。ところが、過去の哲學上の諸説は、ほとんど人ごとに異なつてをる。そこで、哲學の歴史は誤謬の連続だ、とさへいはれるのである。

これは、哲學をつくる材料が、はなはだ加工された事實であり、そして、その加工のしかたが、人々に依つて、はなはだ勝手であるからである。生身の事實に加工して理性をつくる人は、理性論をとき、經驗をつくる人は、經驗論をとき。また唯心論、唯物論、實在論、現象論等々たくさんの哲學説がうまれる。そしてこれらの諸説は、それぞれその範圍内に於て諧調をもつ意味に於て、それぞれその限りに於て、眞理である。算術に於て九進法や十進法のありうる

やうに、また幾何學に於て、ユークリッドの幾何學や後の幾何學がありうるやうに。

私らは、これらの諸説を、それぞれ眞理であるとした。しかし我らは、それらの諸説の中で、何れがよりよき眞理であるか、を考へることが出来る。我らの經驗全體と、よりよき諧調をもつものを、我らは、よりよき眞理であるとみる。それには、その諸説を生んだ生身の事實、いひかへれば、直接の經驗、あるひは我らの生活と、その諸説との諧調をみることである。生活へのこの諧調を、我らは價值といつてよからう。この價值をより多くもつものがより多く眞理である。價值ない哲學はまことに眞理ではありえない。

それ故に、哲學的眞理も、よく眞理であるからには、事實と没交渉であるべきでない、また従つて、あつてはならない。

三、眞理と判断

久しいあひだ眞理はすべて判断のことからと思はれてゐた。現代においてさへこうした立場から眞理の問題を論ずる哲學がかなりある。そのいちじるしいのは新カント派、殊にウィンドルバントやリケルトらの西南學派、です。彼らはその哲學の出發を判断の吟味からする。そし

新カント派

てそこに一種の普遍妥當性——すなはち判断の客観性——を見出す。この客観性、すなはち妥當性、をもつ判断——ないし命題——が眞理である。といふのがその主張になります。

こうみれば、あらゆる眞理は形式論理學の説く四種の定言命題、および二種の條件命題の形以外にはないことになる。殊に一般的性質をもつ積極的の眞理は全稱肯定命題——すなはち「AはBだ」——の形式であらはされることになる。

プラグマティズム

プラグマティズムでは觀念ないし意味の妥當性を問題にする。しかしそのいふところの觀念ないし意味といふは、つまり判断のもつところの——あるひはやがて判断としてあらはされべき素材としての——意味であり、觀念である。もとよりプラグマティズムは判断や命題にはまつたく固執しない、むしろそれからはなれた新しい論理學ないし知識論を立てようとする。しかしそれにしても、命題または判断の形以外のところにある眞理といふものについては——あるひは無意識的には感づいてゐたかもしれないが——さらにといてゐない。つまり言葉以上の眞理といふものについてはさらにといてゐない。この意味において、新カント派とプラグマティズムとは、ともに私らの思想に對立するものである、あるひはともに私らの思想と——かさなる點はあるにしても——くひちがふものです。

註一) 私はこゝに主としてデューイの所説を頭において考へてゐる。——「デューイ論理學說の研究」第七章「思考の内容とその客観性」参照。しかしこれはまたチェイムズについてもいへる。——彼らのいはゆる *idea* または *meaning* は決して普通に心理學でいふやうな單一なものではない。たとへば「この途をゆけば家路につける」といふやうな思考内容がいはゆる「觀念」である。

もとより私らも眞理が判断であり、また命題の形であらはされることを、否定するのではない。むしろ多くの眞理はこのやうな形であらはれることを充分に認める。と同時にまた私らは、さういふあらはされかたとはちがつた形式でも眞理のあらはれてゐることを、見おとさないのです。

すでにみたやうに、眞理自體は、經驗の諧調自體です。

一つの經驗が他の諸經驗と諧調をもつとき、私らはその經驗を眞理であるといふ。そこで眞理は一つの經驗である。この經驗を言葉にあらはせば、それは通常「判断」または命題の形になつてあらはれる、「これは白い花である」「光はエーテルの波動である」等々のごとく。しかし言葉にあらはされたものは第二次的の眞理であつて、第一次に於ては、眞理はまつたく經驗そのものである。そこで「あつて！」といふ一つの經驗、「にくい奴！」といふ經驗、は、

眞理は常に判断の形をもつのではない

そのまゝ眞理でありうる。闇の中からひゆうと突き出された槍のほさを、思はずひらりとさける達人の経験は、すなはち眞理である、「槍が出たやうだ、私は體をかわして、これをさけるべきだ」といふ判断はこの場合に必要であるまい。

眞理が、かならず命題または判断であるかのごとく思ふのは、偏見である。

かりに眞理がその本來の姿を言葉の衣についであらはれたとしても、その眞理は決してその言葉の表面の意味ばかりではない。またかりに眞理が判断といふ制服——正式の形式——であらはれたとしても、そして多くの場合には、その判断の主と客との關係がその眞理の全體であるとしても、またしばしば眞理はその窮屈な制限から脱出して實にすばらしい跳躍をやるものである。そしてこうしたばあひの眞理の姿のほうがるかに美しくはるかに動的であるのが常です。たとへばある有名な社會事業家が、日本のむすめたちにあたへたいまじめの文のなかに、「日本女の帯はあまりに早く解け易い！ 彼等のために固く下帯を締めてやれ！」とある。ある人たちにとつてこれは眞理であらう。しかしその眞理はこの文字通りのもの以上である。また、「あつい夏がお前の頬によこたはつてをる。そして冷い冬がお前の心のうちにある。けれどもそれは變るであらう、可愛い可愛い人よ！ 冬はお前の頬に、夏はお前の心に、來る

あらう」とハイネは歌うた。誰もこれを眞理であるといはう。しかし、あの八月の夏が、彼の女の頬を照らすのではない、あの二月の冬が、彼の女の心に浸みこむのではない、紅の頬のあせてゆくにつれて、心には人間の情愛がもえたつのである。「朝顔につるべとられて貰ひ水」「とんぼとり今日はどこまで行つたやら」「しぶかるか知らねど柿のはつちぎり」^三「白髮三千丈愁によつてこのやうに長い！」^四「弱き者よ、汝の名は女なり」^四また、「實るほど頭は下る稻穂かな」。みんな文字以上の眞理である。また「立ちわかれいなばの山の峯に生ふるまつとしかば、いま歸りこん」などの眞理はまた特殊の諧調である。これに類するものは他の國語にももちろんある。^五

註一 Es liegt der heisse Sommer

Auf deinen Wangeln;

Es liegt der Winter, der kalte,

In deinen Herzen klein.

Das wird sich bei dir aendern,

Du vielgeliebte mein!

Der Winter wird auf den Wangen,

三、眞理と判断

Der Sommer im Herzen sein. — Heine, *Buch der Lieder*.

註二) 三つとも千代の句である。殊にこの最後の句のもつ眞理は誰か知らずに柿をちぎる(もぎとる)のではない、それは處女の初つ契りである、といふ。

註三) 白髮三千丈、綠愁似個長。不知明鏡裏。何所得秋霜。(李白、唐詩選卷之六。)

註四) Frailty, thy name is woman! — Shakespeare, *Hamlet*.

註五) *ἡδονὴν ἀπο γέλωτος μέγιστος λαμβάνειν ἀρχαίως*. (Herakleitos, Burnet 101, Diels 25.)

註六) *Bios: τὰ βίῳ τρέφει βίωμα βίος, ἐργὸν δὲ θάνατος*. [The bow (*bios*) is called life (*bios*), but its work is death.] (Herakleitos, Diels 48, Burnet 66.)

四、眞理の普遍妥當性

眞理は普遍妥當性をもつものだと一般に信ぜられてをるであらう。しかし私らの哲學ではいかやうな高級の眞理といへども、無條件無際限な普遍妥當性をもつものではない。以下にはこれについて吟味するが、そのまへにまづ眞理の普遍妥當性についてのかなりすぐれた新カント派の一學説を引きあひに出さう。

ウィンデルバントないしリケルトは次にのべるやうに、およそ眞理——ないし知識、ないし

眞理の普遍妥當性

認識——のことがらは判断「命題」のことがらであるとみてをるやうです。そこで眞理——ないし知識、ないし認識——の妥當性はつまり判断の妥當性となるわけです。そしてこの妥當性は時空を超越した普遍的妥當性であらねばならぬとします。』

新カント派の所説は普遍妥當性は判断のことがら

註一) 知識認識は命題の形で行はれる。その命題は、文法上の形式からみられるをりは、みな同一形式である、けれどもその主辭と賓辭との關係からみると二種ある。第一は、たとへば「この物は白い」といふやうな判断「すなはち命題」であつて、ここでは二つの表象「または概念」間の性質關係が、ありのままの事實として、のべられてをる、すなはち「白い」といふ性質が「この物」といふ表象に歸屬する性質としてのべられてゐる。もちろん、兩表象間の關係には性質のほかに、あるひは活動、あるひは状態、あるひは關係等の諸關係があるが、それはともにありのままの事實である。そこでこの種の命題は「事實判断」[*Tritel*]といはれるべきもの。次に第二は、たとへば「この物は善い」といふやうな命題「判断」であつて、ここではその判断者がその命題「判断」の主辭に對してもつ標價があらはされてをる。その標價は、事實の叙述ではなうて、あらねばならぬ理想である。このやうな判断はそこで「標價判断」[*Beurteilung*]ないし理想判断である。それは判断者、はすなはち標價者、が主辭の内容についてする同意または不同意である。標價はつまり價値の判断であるゆゑ、それはつまり價値判断である。價値判断にも個人の限りのそれと萬人共通の、いひかへれば客觀的に普遍妥當の、それとがある。哲學的知識の判断はこの客觀的普遍妥當の價値判断だが、それには眞偽に關するもの、善惡に關するもの、美醜に關するもの、の三種ある。眞偽に關する普遍妥當の價値判断の學は論理學、善惡に關するそれは倫理學、美醜に關するそれは美學。そしてこの三者は哲學の基礎科學である。とウィンデルバントはその著 *Philosophie* にのべます。このかぎりにおいては哲學的の

眞理、すなはち價值判断の眞理、ばかりがのべられてをる。するとまことの普遍妥當性——不許不の價值——をもつ判断は價值判断に限られるやうにきこえる。ところがウインデルバントの後継者のリケルトは、事實判断と價值判断との區別をとりきつて、すべての判断はみな價值判断であるとした、すなはち事實判断もまたつまりは價值判断であることをあきらかにした。こうなるとかつてウインデルバントが、たゞ不可不 [Müssen] の眞理であるのみならず自然科学的の判断もまた、不許不 [當爲] の價值をもつ普遍妥當の判断となりうるわけです。またウインデルバント自身も、その最後の著書である「哲學概論」においては、あきらかに數學およびその他の理論科學の普遍妥當性を認めてをる。——*Einführung in die Philosophie* S. 5. —といふのも、かくかくの命題「判断」が正しい、眞理だ、といふなら、そこにはもう價值が判断されてをることになるからです。ウインデルバントは同書の同節以下で眞理の何であるかを論ずるにあたり、まづ同節で超越的眞理、内在的眞理、形式的眞理についてのべます。いふところの形式的眞理は普遍妥當性と必然性とをその標準とする、たゞし普遍妥當性は經驗的意識を超越したもの、しひていふならば意識一般の認める妥當性であり、また必然性も物理的なあるひは心理的な必然性ではなくて、たゞ論理的なそれであるとする。しかしこの標準にもまた疑ひのはひる餘地がある。といふので今度は價值の思想をみちびきこんだ眞理説としてプラグマティズムを引いてをる。がそうした價值はまだ眞理に即するものではなくて、その一要素であるにすぎないと説く。さらにその第十一節においては、「認識の妥當」といふ題目をもつて、これまでの諸眞理説の何れによつてみても、認識の客観的な妥當性はない、意識一般なるものを立て、みてもやはり無理であると論斷し、終ひに認識の妥當性——客観性——は、カントに出發した「認識の對象」の道において求められねばならぬといひ、ついでその第十二節において「認識の對象」はつまりは彼らのいはゆる「當爲」すなはち不許不 [Sollen] であると説き、この當爲が即ち價值である、と述べます。當爲、すなはち價值、が認識の對象である、それゆゑに、

この當爲——價值——をもつ判断は、その對象性、すなはち客観性、をもつわけです。すなはち妥當性をもつわけです。

このごとく彼のいふところの妥當性は現實にかくあるところの妥當でなくて、論理的にかくあらねばならぬところのそれであり、目的からみても理想的妥當性です、

かくて彼らの「現代の論理學では、眞理の學説は價值、すなはち當爲の學説の一部として扱はれる」[*Einführung in die Philosophie* S. 200f.] のであります。

理想的な
普遍妥當
性

このやうにウインデルバントらは、現實的にかくあるまゝの妥當性でなくて、あらねばならぬ理想的の妥當性を眞理に認める。もちろんその妥當性は、たとへ現實的には普遍的でなくとも——といふのは、彼のことばをかりていへば個々の全經驗的意識が實際に認めてゐるのでなくとも——理想的には必ず普遍的でなければならぬものです。

かくみれば、ウインデルバントらの「新カント派の」普遍妥當性の考へ方は、ロツツェのそれとはもうよほどちがつてをるでせう。

ウインデルバントは認識の妥當の問題をば認識の對象構成の問題に移してしまつた。つまり認識の妥當性自體は、物の世界にも、心の世界にも、その最後のテストをもたないことをみて、

終に當爲^{ズン}または價值といふ理想的な認識対象を立て、この対象のゆゑに認識はその對象性——客觀性——普遍妥當性——をもつとしたのです。かくして彼——および彼ら——は、依然として認識の——すなはち眞理の——普遍妥當性を、理想的に認めようとする。しかしこれは、彼らの認める當爲または價值なる理想または目的の許されるかぎりにおいてのみ、許されることです。もしかやうな理想的價值または當爲を認めることを肯んぜぬ思想にとつては、いつたい認識の妥當性——眞理の妥當性——はどうなるか。すでにウインデルバントもあきらかにみたりやうに、普遍的な妥當性自體はとうてい認められえない。

私らの哲學と心は、どこまでもたゞあるまゝのもの——ないしありうるかぎりのもの——をもつて満足せねばならぬ。それは現にないもの、また將來にもありえないものを、理想することをしない。それゆゑに私らの哲學では、私らを誘惑するところのいかやうに望ましいものをも、もしそれが現實にありえないならば、斷じて強ひて求めることをしない。眞理の普遍妥當性は、まことに望ましいものであります。さればこそ過去の哲學者たち、ことに形而上學的論理學者たち、は何れもみなこの望ましいものの獲得者であることを望み、一つしかないそれを確實につかみえたと公言するものが、數しれずあつたわけです。

私らはあ
るだけの
もので満
足するほ
かない

無條件無
際限の普
遍妥當性
はない

眞理の無條件無際限な普遍妥當性はない！これが私らの哲學の主張です、いや正直な告白です。これをあきらかにするために私らは次に眞理と眞理の生きる環境——すなはちその地位——または場——との關係をみることにしませう。

五、眞理とその地位

さきの私らの假説にかへるに、眞理自體は純粹經驗自體です、同じ理を言葉をかへていへば、眞理のテストは經驗の諧調です。

かくみれば眞理はもとより經驗のことからです。そしてその眞理としてのこの諧調をもつかぎりの經驗内において、その眞理は生きてをるわけです。眞理的諧調のひびく場——諧調の場——なるものが、こゝに考へられる。この諧調の場はさきにも述べた地位です。——すべての眞理は、その諧調の場——地位——のかぎりにおいて通用します、妥當します。眞理は決して無條件無際限に通用——妥當——するものではない。いはゆる普遍妥當性も、たゞこの場のかぎりにおける普遍妥當性です。いまこの理をやゝあきらかにしませう。

註(一) 本章第二項参照。——地位 [situation] という字は、デュロイのそれとやゝ通ずるものとみられてもよい。たい

眞理のテ
ストは經
験の諧調
諧調の場
普遍妥當
性と場

し、デューイのいはゆる situation は、思考作用の先件——思考作用をひき起すべき刺激的問題をふくんだ経験状態——であるに對し、いま私のいふ状態はすなはち「諧調の場」です、それは眞理のはたらく場です、それは磁力のはたらきの場にもたとへられませう。——デューイのいはゆる状態については、永野の「デューイ論理學說の研究」第五章第三節參照。そこにはロッチェの思考の先件の改められたものとしてデューイの状態がのべられてある。

場のひろ
さ
最もせま
い場

眞理の最も單一的なものはいはゆる事實に通ずる眞理だ、いひかへれば個々の正當な認識だ。風が吹いた、紙がとんだ、……といふやうな個々の事實——ないし認識——すなはち眞理——は、たゞその「風の吹いた」、その「紙のとんだ」、かぎりの眞理である。その眞理のはたらく場——諧調の場——状態——はたゞもうそれだけの経験である。いま風が吹いたといふことはたしかにあやまりのないことだ、眞理だ、それはまさしくそのかぎりの妥當性をもつてをる。けれども、これはこれだけのことである。この妥當性はこの状態以外にはない。この状態のかぎりにおいてはもちろんそれは普遍してをる。しかし状態が實はポイントほどにも小さい。だからその普遍性も、まことにちいさい普遍性である、それが普遍性であることに相違はないにしても。

やゝひろ
い

「菓子はいまい」といふやうな、常識的経験の眞理の状態はやゝひろい。その普遍性もしたがつてやゝひろい。だがその状態には時に穴があり、従つて普遍性にも穴があくことがあらう。たとへばあまくない菓子もありうるからです。

科學的眞
理の場

科學的眞理の状態はすなはち科學的経験です。しかし科學にはそれぞれその本來の組織系統がある。一科學の眞理も組織系統を異にする他の科學においては眞理でなくなる。たとへば原子の構造に關する波動説と放射説とはおのおのその立場をことにしながら共に眞理である。またさらに著明な例は數學——殊に幾何學——においてみられる。ユークリッドの幾何學は、誰も眞理であるとして疑はないであらう。ところが十九世紀になつてからは、すぎた二千年ものあひだ、唯一絶対の眞理であると思はれてきたこのユークリッドの幾何學と、いかに矛盾した幾何學が説かれるやうになつた。それを「後の幾何學」または非ユークリッドの幾何學といふ、ユークリッドの幾何では三角形の内角の和は二直角に等しかつたのが、そこでは等しくない。しかもリーマンによればそれは二直角よりも大きく、ロバチェヅスキによればそれは二直角よりも小さいのであるが、この三つの幾何學は、しかし、何れも單に理論としてはまったく正しい。そこで、もしこのうちで何れがより多く正しいかを定めるをりには、私らは單

に理論に依らずに、その何れが私らの生活により多く便利であるかをみねばならない。もちろんその生活は科学をも意味する。そしてアインシュタインの原理の説明に役立つものは、ユークリッドの数学でなくて、一つの非ユークリッドのそれであるといふ。そこで今日では一見してまつたく矛盾しあうてをるこれら二つの幾何學は、いまのところ共に眞理なのである。三角形の内角の和が二直角に等しいといふのも眞理であり、等しくないといふのも眞理である。といふのはまことに不合理の如く見えるが、これは眞理を唯一と見ることからくる偏見である。私らがユークリッド的空間を思ふ場合にはユークリッドが、非ユークリッド的空間を思ふ場合には非ユークリッドが、眞理なのである。眞理はその状態に従うて異なつてよい。

(註一 三頁参照)

哲學的眞理の場

哲學的眞理の場は實に複雑である、雑多である。哲學的經驗のなかには各種の場が(もし比喩的にいふならば)あるひは直角に交はり、あるひはななめに交はり、あるひは遠く離れて平行にあり、等々々、…：實に多様である。そこで一哲學の眞理は他の哲學の眞理と、まつたく矛盾したり、やゝ似かよつたり、等々々々…：の實に亂雜な眞理の場があるので、哲學には定まつた眞理がないやうにさえ見えます。これはつまりそこにある諸場があまりに錯雜して

交はつてゐるため、その眞理の状態があきらかにされず、従つてすべての眞理がみな眞理でないごとくなるのです。

知識以外の場における眞理

道德的眞理

眞理は單に知識だけのことからでない、それは經驗全般のことからです。そこでこゝに倫理的眞理や美的眞理があることになる。倫理的眞理ももとよりその倫理的状态のかぎりにおいて眞である。たとへば——今日の道德においてみれば——「男女の肉的交易」は未婚の男女にとつては惡であり、既婚の男女にとつては善である、戦争においては殺人が概して善であり、平時においては絶對に惡である、等々々々。また東洋の道德的眞理はかならずしも西洋の道德的眞理でない、またこの逆にもいへる。——しかしこれは道德のせまい諸状態をみてのことであるが、これら諸状態を次第に統合して次第に大きい状態を考へてくると、二つの矛盾^{アウフヘーベン}を止揚したさらに普遍的な眞理ができませう。この普遍化を極限にまでおしすゝめればそこにはゆる最高善^{グット}といふ最も普遍的な倫理的眞理がえられる道理です。この道理によつて、過去の哲學者——倫理學者——たちは、最高善を説いた。しかし、どうしたことかその最高善は唯一でなくて、ほとんど哲學者の頭數ほど多數にあつた。彼らは依然として異なつた場——主としてそれぞれの學說のかぎりの場——に生きてゐたために、こうなつたのです。

五、眞理とその地位

註(一) これは私らの倫理的眞理ではない、たゞ一般道徳のそれです。
註(二) summum bonum.

藝術的眞理

知的眞理や徳的眞理はおほむね言葉にもられうる、必要に應じては論理的命題の形式にもられうる。だが美的眞理のあるものは、——もとより言葉的形式であらはれるものもあるが——まづたく言葉的形式ではあらはされえない。舞踊、彫刻、繪畫、音樂、等がそれです。これらは依然として經驗の諧調である、といふ點からしてやはり眞理であります。詩歌の歌はこれらとちがつて言葉にあらはされた美的眞理です。——これらの美的眞理もやはりそのかぎられた状態をもつ。その状態はきはめてせまいこともある、やゝひろいこともある、はなはだひろいこともある。たとへばかいた人にだけ美しくみえる繪もある、東洋人にだけわかる繪もある、古今東西を通じての誰もが感歎する繪もあるやうに。

普遍妥當性のひろさと深さ「または高さ」

以上は普遍妥當性のひろさばかりをみてきた。實際これまでの哲學者らは妥當性をはなはだやかましく論じながら、たゞそのひろさばかりを説くのであつた。しかし私らはこゝに妥當性のひろさを問題にするとともに、そのたかさを問題にしようとする。眞理のねうちを高めるも

のは、その妥當性のひろさばかりではない、そのたかさも大いに關係する。

妥當性はかならずしも萬人によつて現實に承認されてゐなければならぬわけではない、といふ新カント派の説明には私らも賛成する。またその妥當性はつまり當爲——不許不——からくるものだといふことについても、もしその當爲をすつかり私らの解釋にまかせてくれるなら、あるひは承認できることかもしれない。だが私らは、すべての眞理がみな無條件無制限の普遍性をもつてゐねばならない——そうした普遍性のないものは眞理でない、といふことはできない。私らもあるひは妥當性の普遍性を認めてもよいかもしれぬが、私らに認められる普遍性はかならず條件的なものである、その普遍性は限られた廣さのかぎりの普遍性である、それは状態のひろさのかぎりの普遍性である。ところが状態には——かりに比喩的な言葉を用ひるならば——ひろさとたかさ「あるひは深さ」とがある。この状態の高さ深さにしたがつて、その状態における經驗の諧調はあるひは高尚すぎて凡人にひびかず、あるひは深刻すぎて浅い心のもちぬしには容れられないことになりす。こうなるとその眞理の妥當性の普遍性——ひろさ——はたしかにせまくなる。けれども決してそのせまさに比例してその眞理妥當性のねうちが小さくなるわけではない。それはたとへば、子供にわからない繪だからその繪の妥當性が小さい

ひろさとたかさ

とはいえないやうに、また常識人にわからないから科學的眞理の妥當性が小さいといえないやうに、また感情の貧弱な奴らにわからないからこの文學的眞理はねうちがないのだといえないやうに、そのやうに妥當性自體はそのひろさのせまさをそのたかさで充分につぐなふ。茶道や生け花のもつ眞理の妥當性は西洋人にはたかすぎる、だがおそらく香水のもたらす諧調——眞理——はたいいていの日本人にはわかるまい。哲學は凡人に對して高すぎる妥當性をもち、朝三暮四の權謀術數は愚民に對して高すぎる妥當性をもち、

註(一) 眞理性の容量はこのたかさ「またはふかさ」とひろさとの——たとへば——相乗積であるはずです。

さて状態自體は何であるか。それはいふまでもなく眞理的諧調をもつ経験の場である。しかし「経験」の内容は大きく雑多です。その根源的なものは純粹経験でありその派生的なもの、心的経験と物的経験とです。そこで経験の場としての状態は、時には純粹経験のかぎりであるが、また心的経験および物的経験のことがらであることが多い。純粹経験のかぎりの諧調は絶對的である、まだ眞偽の差別の出ぬまへの絶對眞理である。普通のいはゆる眞理は多く心的および物的の相對的客觀世界のことからです。そこで経験の諧調は、心的経験の諧調、物的経験の諧調、心的物的兩経験の諧調、であります。そこで、経験の場は時に物的世界の場でもある。

眞理の容量は兩者の相乗積

場自體

場は動的

さてこの場は不変恒常固定であるか？ といふにそれは無常不定動的である。それゆゑに状態のかぎりの普遍妥當性自體がまた固定的でなくなる、すなはち眞理自體は動的であることになる。

六、眞理の固定性

|| 眞理は動的

本來は動的
相對的に
は眞理の
固定恒常
性がある

眞理自體は経験の諧調である。それゆゑに眞理の妥當性はたゞその諧調の場——すなはち状態——のかぎりのことからである。ところがこの諧調の場は決して固定的なものではない、それは経験自體がすでにまつたく動的であるゆゑに、またまつたく動的である。状態が何らの矛盾をもふくまずに、たゞたゞ諧調諧調諧調であるかぎりには、そこにはたゞたゞ眞理は恒常である、固定性をもつてをる。けれども一つの経験の場は他の経験の場の影響を受けやすい。するとその場はそのうちの諧調に變調をきたすであらう、あだかも一つの磁場が他の磁場への影響を受けたときのやうに。(そしてまたそのときのやうにその變調は、げんみつには相互的でありませう。) この變調はすなはちそこにはたゞたゞ眞理の變調です。變調は諧調の亂れです、矛盾

六、眞理の固定性 || 眞理は動的

諧調の亂
れの調節
から新ら
しい眞理
がある

盾です。

この亂れ、この矛盾、をなくするためには、眞理のはたらきかた、すなはち經驗のはたらきかた、がうまく調節されねばなりません。うまく調節されてふたたびそこに新しい諧調があることになれば、すなはちそこに新しい眞理があることになるのです。

この説明はやゝ比喩的になりましたが、きはめて頑固なごとくみえる。いかやうな眞理でも、かならずいつかは多少の變調をもちます、そしてすくなくとも修正されねばなりません。さればこそ（すぐまへのべたやうに）久しいあひだ確固不動のものと思はれてゐた、たとへばニュートンの力學的法則でさへ、今日の科學的状態においては不十分なものとなり、すくなくとも相對性原理等の立場から修正されねばなくなつてきたわけです。同様に今日の科學的状態においては、ユークリッドの幾何學では不十分になり、いはゆる「後の諸幾何學」が説かれるやうになつたわけです。

そこで、もうくどくどと説く必要はない——私らが實際にもちうる眞理は永久不變な固定的なものでは斷じてありえない。眞理は動く、といふのがわるければ、眞理はたえず生長する、あるひはつくりかへられてゆく。

——もし動かぬ眞理があるとしたら、それはたゞ「すべてが動く」といふことだけだ。→

註(一) 「すべてが動く」といふことが眞理であるなら、その「すべてが動く」といふこと自体がまた動いてもさしつかへない、そうすれば依然として「すべてが動く」といふことは眞理であるから。——第十章第五節頁參照。

(かくみれば哲學上の學説がめまぐるしく轉變するも、あえて不可思議ではない。)

七、眞理の相對性

眞理はか
くて相對
的

眞理が相對的なものであらうことも、もうたいてい推測されませう。すでに眞理が状態に即する動者である以上、相對的なものであるはいふまでもない。

絕對眞理
は眞僞以
前のもの

もつとも本章第二節には一種の「絕對眞理」を説いてある。しかしその絕對は眞僞の相對を超越した眞理であるといふ意味の絕對であつて、それは決して他のいかやうな眞理にも依りかからぬといふ意味の絕對ではない。このごとくであるからさきにいふところの絕對眞理は實は眞僞以前のものであり、従つてそれは絕對眞理であるとともに、また絕對虚僞でもあるわけです。

他のいかやうな眞理にも依りかゝらずに自ら確固不動に存在し、そして他のあらゆる諸眞理

眞理は相互に相
依つて存立
する

の根源——といふよりもむしろ他のあらゆる諸眞理のよりかゝるべき絶対の壁——であるところのいはゆる絶対眞理なるものは、とうていあられませぬ。——相対的な個々の諸眞理は自ら立つて在ることはできない、必ず他のより大きい眞理にたよらねばならない、とすると最後に何物にもたよらぬ究極絶対不動の眞理がすくなくとも一つはなければならぬ。といふのが眞理の絶対性を求める哲學者らの論理であり、また心理である。その極彼らはたとへば神などのやうな究極絶対不動なものを立てた。しかしその不都合であることは、これまでに説かれてきたとほりであります。しかし、もしこうした究極絶対不動の眞理がないと、はたしてその他の相対的諸眞理は立つことができないであらうか、確實であることができないであらうか。

いはゆる絶対眞理は究極の地點に確立する壁です。それは諸他の眞理がつひにはもたれかゝらねばならぬところの岩壁です。だが私らの哲學にはそんな岩壁はない。では眞理は立つことができないか。といふに決してそうではない。私らの諸眞理は相互的に立つ、他の絶対者に依りかゝることなしにたゞ相互の相対力によつて立つ。一本の棒はおそらくその依りかゝるべき壁の類がなければ倒れるであらう。だが數本の棒は相互にもたれあうて立つことができる。そのごとく私らの哲學においては、諸眞理はその相互間の諧調のゆゑに、他のいかやうな絶対

相対性の
故に絶対
性がある
小さい諸
絶対性

壁にももたれずに、立つことができる。——岩壁の移動は困難であるが、相対的にたよらうて立つた三本の棒はその足場に從つてまた自由に移動しうる。——そのやうに私らの哲學の認める諸眞理は、その相対性によつて却つてその絶対性——不動性——をうる。大きい相対性は、そのうちに小さい絶対性を生ずる、動中に靜の生ずるやうに、また懷疑中に確實の生ずるやうに。

相対と懷疑のヴェイルにつゝまれた世界は動いてをる——これが世界の眞實である。

八、知 識

眞理と知
識

眞理は經驗の諧調自體である。この諧調の貯へられた可能性が知識である。そこで、眞理は現勢であり、知識は潜勢である。知識の體系化された集團が科學である。」

註(一) 眞理知識科學の關係については永野の「論理學概論」第二十章に詳しく述べられてある。

知識と本
能

しかしすべての眞理がみな知識になつて貯へられるかといふにそうではない。眞理は經驗の——すなはち全命の——諧調である。生命の諧調はかならずしも知識に凝固するわけでない。

たとへば私らの生命の行進は知識以外の根源からくる諧調をもつことが多い。いはゆる下等な動物になればなるほど、生命の諧調——すなはち経験の諧調——は本能といふ力によつて行はれる。そのいちじるしい例は昆蟲においてみられる。

この理は植物の世界に、さらには無生物の世界にまでも、おしひろめることができる、もとよりきはめて稀薄にはなるが。

きはめて広い意味に解するならば本能もまた知識である——無意識的の、黙々の、知識である——、といへるでせう。時に本能は知識以上に眞理であります。

註(一) 第十二章第一節五四—五五頁註三参照。

哲学
一
世界

第十二章 哲学、人間、世界

一、知識と世界

こゝにまたすべてをふりかへりみますならば、そしてあらゆる存在を大観しますならば、——まづはじめに純粹経験がある、それは生命である、それは流動である、そして流轉生長の結果こゝに世界のすべての存在がある、のであります。

純粹から不純極まるまでのあらゆる経験のうちにある諧調自體——いひかゆれば、純粹經驗的諧調から心的物的のあらゆる経験の諧調自體——すなはち實在世界ないし(心的物的の)現象世界における経験の諧調自體——が、眞理であります。次にこの現勢的諧調が潜勢力となつて貯藏されたものが知識である。(といふことは前章の終りにのべたとほりです。) たゞし知識には消極的なものがある。といふのは、普通の知識は積極的諧調自體の潜勢力であるが、時に消極的諧調——すなはち(眞理に對する)誤謬といふ不調和をさけるための消極的「または否定的」諧調の潜勢力としての知識もあるからです。

知識の體系と世界の現實

眞理は事實です。そして知識は事實の記録です。再現能力をもつレコードです。もし世界が事實の總體であるとするなら、知識はすなはち世界の記録です。こゝに知識の體系と世界の現實とがあるわけです。しかし知識の知識があるからには、知識もまた世界の一面です、知識もまた現實の一部であります。

Record films

註(一) 日本語でも「ほんとう」だといふことと「事實」だといふことは、たびたび同義に用ひられる。英語の truth はときどき fact とまつたく同義に使はれる。たとへば The truth is that……と fact は The fact is that ……といつても同じ意味になる。またフランス語の verité, ラテン語の veritas にも、同じやうな意味があるやうです。

註(二) たとへば肉聲の諧調は眞理であり、その(著音器的)レコードは知識です。またたとへば、人の動きや風景の諧調は眞理であり、その(映寫用の)フィルムは知識です。それらはともに同じ諧調を再現すべき潜勢力です。その意味において本能的潜勢力もまた知識であるといへる。

註(三) してみると知識は「經驗能力の貯蔵」であるともいへる。經驗をきはめてひろい意味にとると、世界のあらゆる貯蔵能力——潜勢力——が知識であることになる。たとへば、やがて芽を出し根をはり花を咲かせて實を結ぶべき一粒の豆のその能力はその知識であることになる。が、これはすでにあまりに散漫な領域の知識——普通には知識として通用せぬところの知識——であります。だが、昆蟲類の本能はすでにりつばな知識です。——たとへば馬はその卵を馬の脚または肩にうみつける、と馬がそれをなめて胃の中に入れる、とそこで幼蟲は發育する。このを

知識と世界の別種の對立ではない

り馬は、その卵を馬のなめること、その幼蟲が胃のなかで育つこと等を知つてをるごとくであります。また一種のしびれ蜂は他の蟲をいく針かを刺すと、ちやうどその刺し口はみな神経中樞になつてゐて、さゝれた蟲は死なずにしびれてしまふ。彼はさながら大昆蟲學者であり同時に大外科醫であります。またよく引かれる例にシタリスといふ甲蟲がある。この昆蟲はアントフォラといふ一種の蜜蜂の掘つた地下道の入口に産卵する。その幼蟲はしばらくそこに待つてゐて、やがて穴から出てきた雄蜂にうつる。やがて交尾期がきて雄蜂が雌蜂に接する機会に幼蟲は雌蜂にうつる。雌蜂が産卵するとその卵に移る。数日のうちにその卵を食ひつくす。そしてそのまゝそこに止まつてゐて最初の變態をやる。と今度は蜜の上に浮けるやうな體になつてゐて、次第に蜜を食つてしまふ。やがて蛹となり、次に成蟲としての甲蟲になる。おもふに幼蟲はそこを雄蜂の通ることを知つてゐるごとくだし、また交尾期には雌蜂にうつれること等々々を、次々に知つてゐるやうだ。そして成蟲シタリスはその産卵のはじめにあつて、これらを見なあらかじめ知つてゐるごとくである。(とベルグソンはその著書の「創造的進化」[L'Evolution creative p. 158.]に、本能の知力同様に、あるひはそれ以上に、賢明であることを明かにするために、このやうな例を引いてのべてをります、そしてたゞちにつけて、「この知識は、もし知識がこゝにあるとするなら、たゞかくされた知識であるにすぎない」といひます。——だがこれはたゞ顯著な類例であるにすぎない。そのほかいかやうな動物の生活をみても、そこに長いあひだの過去の經驗の精髓としての本能的いし知慧ないし知識のないといふことはない。極端にいふなら、こうした知識——經驗能力の潜伏力——は無生物の世界にもある。それはとにかく、こゝではたゞ知識があながち人間といふ經驗統體の専有でなくて他のいかやうな經驗にもまたあること、および知識と世界とが、つひにはまつたく別種の對立ではないこと、に注意しておきます。

かくて知識と世界はまたまったく別種の對立ではありません。

二、哲學と現實世界

哲學は何であるかは第一章において豫見的に考慮された。そこでは哲學が、現實に何であつたかといふことと、また眞實には何であるべきかといふことが、考慮されてある。そして眞實にはそれは私たちの生活であらねばならぬとされてあるが、それにしても現實には——この眞實的理想をも一部分ひきくめて——哲學はおよそ知識のことからである、たとへそれが知識自體であるにしろ、または知識への愛であるにしろ、あるひは知識的生活であるにしろ。そこで哲學は知識である、あるひは學問である、あるひは見解である、しかもそれらの一般なものである、とみられるのが普通です。いまこの普通のみかたによるならば、哲學はすなはち知識自體でありませう。

いまもし哲學が知識自體であるとしたら、哲學は世界に對して、いかにあるか？

これへの答はすでに一部分前節にあげられてをります。——哲學と世界とは、一般に思はれてゐるほどそれほど反對的なものではない、のであります。——すでに哲學が知識であるなら

哲學と現實世界

Polise

(一) 哲學を知識自體であるとしたら——

その對立は一體的

、哲學もまた世界の記録であります、すなはち哲學は世界觀であります、またもとより人生觀でもあります、人生は世界の一面でありますから。しかしその記録は、その世界觀は、單なる靜的なものではない、それは蓄音器のレコードのやうに、活動寫眞のフィルムのやうに、動の貯藏である、潜勢力である。

だが哲學に記録される世界は部分的特殊の現實世界ではない、たとへ部分や特殊が記録されるにしてもそれはかならず全體の部分であり、一般の特殊である——つまり哲學の意志はいつも全體——一般——にある。これが哲學と他の諸特殊科學や個々の諸知識との差異であります。全體としての世界——あるひはやゝ問題を局限して、全體としての人間、といふよりもむしろ世界における人間——をうつすのが哲學であります。たとへば銀幕上の俳優の一つの笑ひ、一つの叫び、そのものは哲學ではない。だが——かりにそれが一つの物語であるとしたら——その物語全體のなかにおけるその一つの笑ひその一つの叫びはすなはち哲學であります。聲樂家の音聲をたゞその物理的效果においてきくならば、それは哲學ではない、だがそれをその一つの音樂の構成要素としてきくならば——すなはち全體のなかの一部——としてきくならば、それはもう哲學であります。

哲學は偏在する

しかしそれをもちえぬ人はいない

哲學は現實世界の裏か

映畫や音樂にすでに哲學がある。そのやうにして哲學は、およそあらゆる現實世界にあるものです。チンドン屋のチンドンに、豆腐屋のラッパに、ダンサーのためいきに、女給の姿態に、青年のラッパ・ズボンに、暴力に、感激に、榮華に、貧乏に、すべての世界に。——だがその哲學は、哲學をもちえぬ人に對しては、ありえない。その哲學を感受するだけの受信装置のある人間——そして常にそれを感受してゐる人間——がいゆる哲學者であります。非哲學者はこの種の波長に對して無感覺であるわけです。たゞしこれはたゞ比喩であります、哲學者がラヂオの受信器のやうに受動的である——またあるがよい——といふ主張ではありませぬ。

哲學と現實世界の關係はこのごとくである。ところが普通には哲學と現實世界とはあべこべの關係をもつものゝやうに思はれる。またさうだと信じてをる哲學者もある。がこの認識はまだ不足である。たとへば。常識は感覺を信賴する、が哲學はそれを不信用して、感覺とはあべこべの理想的なものを尊重する。常識は世俗のことからにあくせくとする、しかし哲學はそうした世俗を超越しようとする。等々々々、およそ哲學は現實を裏がへさうとする。といひます。——私たちの哲學でも、ひとたびは常識の信ずる現實の世界をすべて懷疑して、やがてつかみえた確實なものは、やはり現實世界の存在とは異なつたところの純粹經驗といふやゝ超現實に

みえるところの根本實在であつた——それは實に現實世界の裏の裏の、いちばん内面の、存在である。それゆゑ私たちの哲學が究極につかんでみたものは現實世界の内面である、裏である、あべこべの側である。その意味においては、私たちの哲學もまた裏がへした世界をみてをる。

けれども私たちの哲學は、この裏がへした世界をひとりほゝゑむほど、馬鹿でも皮肉屋でもない。裏をみることに、内面をみることに、は哲學の仕事の一部ではある、が全部ではない。裏をみることに——内面をみることに——は、どこまでも表を正しくみるための仕事でこそある。そこで哲學は——まことの哲學は——「裏がへした世界」ではなくて、「また裏がへした世界」——であります。——「裏がへした世界」はたとへばフィルムネガティブです。「また裏がへした世界」はそのポジティブポジティブです。そして哲學はやがて映寫幕上の活動自體です。そうです、哲學はやがて活動自體——生活自體——であるべきですから。

哲學者も——哲學自體と同様に——たとへ一たびは現實世界の表面から去つてその内に沈潜しても、——あるひは一派の哲學のやうに現實世界から超越してはるかの高所にのぼつたにしても、——やがてはまた現實の表面に浮いて、——あるひは現實の泥中におりたつて、——來なければなりません。そののできない哲學者はまだネガティブの——フィルムネガティブの

また裏がへした世界の哲學

まことの哲學者

やうなネガティブの——哲學者であるにすぎません。いふまでもなくほんとうの哲學者は、ポジティブでなければならぬ、あるひは現實世界の騒々しさを諧調に導くために、あるひは現實の泥水を浄化するために。

もし哲學者を賢者と同義にとるなら、一般現實世界の平凡人の裏がへしの賢者が哲學者である、かといふに徹底的にはそうではない。平凡人を裏がへして賢者にし、その賢者をもいちど裏がへした凡人がまことの哲學者である、哲學を講義する人——哲學の本をかく人——哲學を會話する人——たちは、哲學の本の出版者があながち哲學者でないと同様に、あながち哲學者ではない。

三、哲學と生活

だが哲學は第一義的には決して知識自體ではない、また知識の體系としての學問でもない。知識としての哲學——學問としての哲學——は、いはゞ生きた哲學のレコードです、いはゞ生きた哲學のフィルムです。それゆゑにほんとうの哲學は、哲學書を読んだり、その講義をきいたり、それを會話したり、するところにいつもあるわけではない。といふのもそうしたところ

(二) 哲學は第一義的には知識自體ではない。——生活自體だ

にある哲學はおよそレコードの哲學であり、フィルムの哲學であるにすぎないからです。そこでほんとうの哲學は生きた現實のなかにこそある、すなはち生活自體のなかにある、(第一章にあらかじめのべられてあるやうに)。——だがいふところの生活とは何か。

生活をさへめてひろい意味にとるなら、それは經驗と同義であつてよい。經驗はありとあらゆる存在であるゆゑに、生活もまたあらゆる存在である。經驗の主體があえて生物でないやうに、生活の主體もまたあえて生物でなくともよい。宇宙間のあらゆる經驗統體はみなその經驗を生きてをる。たゞその經驗の生きたのきはめて微妙なものを生活といひ生命といふにすぎない。微妙といふはたゞ程度の問題であつて、質の問題ではない。それゆゑにその程度を一方の極端にまでもつてゆくなら、あらゆるはたらきがみな生命ないし生活のはたらきである、風のごきも、水の流れも、音波も、光波も、エレクトロンの運動も、そしてまた諸天體の回轉も。——だから、もし極端にいふなら、エレクトロンがその運動をするところにも——すなはちその生活を生きたるところにも——もとより哲學がありうるはずである、エレクトロンのもつ哲學が。しかしエレクトロンや星が、それら自體の哲學をもちうる、といふことは、私には考へられない、——私にはおかしく考へられる。といふのも普通にそれらは無生物であるとき

生活——經驗——萬有

れ、従つてまた生活や生命をもたぬものと考へられてゐるからです。そして私らを土台にしていふなら、生活や生命はいはゆる生物のことからである、と限定せねばなるまい。ところが、すべての生物が哲學をもちうることも普通は考へられない。植物にはもとより、また下等の動物にももとより、——總じて人間以外の動物には、哲學はない、と考へられる。いや人間でも、すべての人間が哲學をもつわけでない。

そこで哲學は——人間以外の經驗統體も、極微のかたちで哲學をもちうるわけではあるけれども——こゝにはまづ人間といふ經驗統體の生活内に限定されねばなるまい。

哲學は生活だ——
しかしすべての生活が哲學ではない

哲學は生活である、——そして極限的にはあらゆる生活がそのまゝ哲學であるともいえよう。けれども、哲學の名にあたひする哲學は生活のあらゆる場所にあるわけではない。いひかへれば、すべて哲學は生活である、がその逆に、生活がすべて哲學であるとはいへない。ではいかやうな生活が哲學であるか。——それは部分の全體的意義をみる生活です。

だが部分の全體的意義をみることに止まつて、ふたたび部分の生活を尊重しえぬ生活——いひかへれば裏がへした現實ばかりをみて、ふたたび裏がへした現實に歸ることのできない生活——はまことの哲學ではない。

この意味において、哲學者ぶる哲學者は哲學者でない。

表ばかりしか見得ない人、表にあきて裏ばかりをみてゐる人、表をみて裏をみてまた表をみる人。——凡人、哲學者、まことの哲學者。

四、理想と現實

哲學が「裏がへした現實」であるにしても、「また裏がへした現實」であるにしても、それはとにかく現實の内面を直視する、奥底を深くさぐる。ところがそこがあまりに暗いために、眼に光のたりない哲學者たちは、あるひはそこを神秘の祠ほくらとし、あるひはその深さを高さに錯覺して、現實はひくく、哲學は高いとする。——要するに彼らはそこにあるものをみることをえずして、あれ、よ、いものがあるものにきめてしまふ。——あやまつた理想主義の哲學者はおよそこの類型であります。

理想と現實の相互的内在

理想は高くはない、むしろ深い。理想は超越的ではない、むしろ内面的だ、内在的だ。といふのも理想は決して現實からはなれてあるものではなく、現實に即してあるものだからです。——世界は——あらゆる存在は——すべて流れである。そしてその流れは内面から表面に動く

流れである。そこでその内面の源流をみれば、表面のながれがどの方向にむくべきかがわかる。すなはち現實の内面を哲學すれば現實のむかうべき方向がわかる。このべきが——人間生活においては——理想である、あるひは理想的法則である、あるひは道德的社會的法則である、(そして理想は時に目的である。) もしこれがいはゆる自然界のことならであるならば、それは自然界の諸法則である。

——このやうに理想は現實に即してある、理想は現實の變形である、理想は現實の必然的打算である、(たゞしいはゆる功利的打算ではない)。してみると理想——あるひは目的——は決して勝手につくられるべきものではない。)

註(一) 第八章第七節参照。

理想の法
則と現實
の法則

そこで理想と現實は根源においては同じものです。また理想的法則ないし目的的法則ないし道德的法則と自然必然の法則とも、一般に思はれてゐるほどの本質的差別をもつわけではない。——すなはち現象世界の限りにおいては、理想の法則も現實の法則と同様に因果的であり、その意味において必然的である。しかし現象界の必然的法則は、實在界——純粹經驗の世界、

すなはち純粹自我の世界——においては、自由の法則である。自由法と必然法のつひには同じものであることも、まへののべたところです。

五、人間

人間

私らは諸所で「私」——または「人間」——といふ字を、かなり雑然と、あるひはかなりあいまいに、使ひすてきた。そこでこの書の終りにちかいかいま、人間の何であるかをあらためて考慮してみよう。もつともすでに第七章のなかで、「自我」としての「私」ら、すなはち「人間」の何であるか、形而上的に説かれてある。いまそれを簡単にくりかへしてみれば。——不斷に變化流轉する究極實在としての純粹經驗が生長するにつれて、そこに經驗統體ができる。それを全體的大規模的にみればそれはすなはち大宇宙の全存在である、それを個々の小規模的にみればそれは個々の人間、個々の動物、植物、礦物等々々々々々……ありとあらゆる全宇宙の種々相である。——一滴の雨も、一分子の氣體も、そして一粒のエレクトロンも、すべてみなそれぞれの經驗統體であるのです。されば世界をこの小さい自我自體であるとする唯我論(唯我論)が眞理でないと同様に、世界をたゞ人間だけの生活とする人本主義(人本主義)もまた眞理ではない。

人本主義
は一種の
唯我論

たとへ哲學が大宇宙を裏がへしてひとたびはそこにたゞたゞ自我をみたにしても、またそれを裏がへすをり、そこにふたたび自我と平等に對立する非我の世界——客觀世界——の嚴存するを認めるであらう。^{四)}

哲學は裏に自我をみて表に世界をみる

註(一) 第七章第四節二八二頁以下參照。

註(二) こゝに一つのアナロギアをもちださう。——相對性理論からみれば地球が太陽のまはりを廻轉しようとして、太陽が地球のまはりを廻轉しようとしても、さらにさし支へない——兩者の相違はたゞ見地の相違であるにすぎない。そこで相對性原理からみれば、コペルニクスの轉廻もたゞ半面の眞理である。(のであつてみればカントのコペルニクスの轉廻もまたたゞ半面の眞理であるにすぎないでせう。) そこで哲學的見地の相違に従つて自我を裏にすることも、非我を裏にすることも——あるひは自我を表にすることも、非我を表にすることも——できる。だがその何れに執着しても眞理は半面的になる。そのやうにまた精神を實在とするか物質を實在とするかといふことも、正當な問題でない、——それらはともに同じ存在の両面である。——さればこそ私らの哲學においては、——自我即世界

第七章第三節、第八章第一節]である、主觀客觀「第七章第二、三節」であります。

註(三) 人本主義 [Humanism] は人間の生活をすべてであるとする。とすると、それはやはり人間的唯我論である。——私らのいふ生活——すなはち經驗——は、もとより一小我の生活でなく、また人間だけの生活でもない。それは全宇宙の全存在である。——たゞし人本主義には、倫理的ないし功利的のそれもある。

註(四) 第八章の所説。

こゝに私と世界、ないし人間と世界、があります。

六、世界における人間

人間と萬有

世界は私だけでない。——彼も君もある、さらにその他の諸生諸物がある。そしてつまりはこれらすべてが平等にある。——そこで私が君に、彼に、その他の人々に、その他の諸生諸物に、對する關係がこゝにあることになる。そしてこゝに社會があることになる、そして道徳があることになる。この私に對してある諸他の人々、諸他の動物、諸他の生物、諸他の存在、は何であるか、いかやうにあるか、いかやうにあるべきであるか。といふことの考慮から、社會法や道徳法の哲學が——社會哲學や倫理學が——あることになるであらう。が、そうした特殊の考察はこの書ではなされぬまゝにのこされます。そしてたゞこゝでは、世界における私ら人間の位置をみるにとめておきます。

全世界——大宇宙——も經驗統體である。私ら人間も經驗統體である。人間以外の諸生諸物も經驗統體である。いひかへればこれらすべて——すなはち大宇宙——すなはち大宇宙の一切の諸内容——はつまり永遠に不斷に流轉する經驗の表現である。この經驗の流れを、(たと

生命と文
化

へば物質と精神の兩層等々にみることもできるやうに、また、生命と文化の兩層にみることもできる。——このをり生命はその經驗の流動自體である、はたらしき自體である、そして文化はその流動の沈澱物である、といふよりはむしろその生命——生活——の排泄物——くそ——である。このやうに生命からはなれた一切の文化はすでに死物である。けれどもそれはまたのちの生命のかてになる、あだかもくちはたてた有機物が生命の肥料になるやうに。——道德、政治、教育、藝術、科學、哲學等々々々の文化がある。これらがいま文化として扱はれるをりには、もうそれらは遺骸である、排泄物である。だがそれらはまた同時に生命でもありうる。私らに刻々に生きられてゆく道德、政治、教育、藝術、科學、哲學等々々々はすなはちそのまゝ生命のことがらである、生きた經驗——生活——のことがらである。

すべてのごとくであります。ゆゑに哲學も、文化としてあつかはれるかぎり、たとへば知識の體系としてあつかはれるかぎり、死物である。哲學がしかし生活自體として生きられてゆけば、その哲學は生きてをる、かつて「第一章に」、まことに哲學を知るには哲學を生きたねばならぬとのべたのは、この道理によります。

さて世界における個々の經驗統體としての私らは、世界と同様にその生命と文化をもつ。そ

文化とな
つた哲學

生命の無
常、永遠

生命の價
値、無價
値

まことの
永遠

して世界の生命の永遠であるやうに、私らの生命も永遠である、たとへその統體は破壊していはゆる死の運命をもつにしても、死もまた生命の一位相であるのゆゑに。また私らは世界の文化を食うて新しい文化を排泄してゆく——こゝに世界における人間の位置があります。その位置はそれほど大きくも高くもなく、またそれほどみじめな悲しいものでもない。といふのもそれは一本の草の生命ほどに重要であり、またそれほど悲しくもうれしくもあるからです。だがもし人間が草よりもより大きい意義をもつといふなら、それは人間のもつ永遠性である。といつても時はたゞ現在である。ならば永遠性はいはゆる時間の長さには關係しない。時はたゞ現在だ、現在はふくれた永遠だ。されば永遠性はたゞその内容にある、ふくれさ加減にある、——あるひはそれの認識にある。千年の壽命を保つ楠のその現在の内容——つまり現在のうちにつゝまれた過去と未來——は貧弱である、むしろ意識的には零である。しかしわづか數十年の壽命をもつ人間の現在の内容——現在のなかに認識される過去の要素および未來的要素——すなはち經驗の質量——はきはめて大きい、心のゆたかな人においては極度に大きい、——それゆゑにこそ私らはいはゆる死の運命をもたずすむ無生物でないことをうらまらず、繁殖しても親の死のないアミーバであることを望まず、いく代もの人々の生ひたち老ひはて、

ゆくをみる鎮守の森の一本の楠であることをねがはないのです。といふのも「時」の質量は千年の楠においてよりも五十年の人生においてより大きいからであります。

註(一) 第九章所説

註(二) 同前。

七、哲學と人間

「人間は葦だ、自然界でいちばん弱いものだ。だがそれは思想する葦だ」といふある哲學者のことばにはある意味において、自然界——世界——における人間の位置を、充分に認識してをる。そしてまた「私らのすべての尊さは思想にある」といふことも、いちおうは道理であります。といふのも、思想することはつまり生命の——經驗の——現在の内容を、すなはち時の質量を、大きくあらせるからです、人生を永遠的にするからです。

註(一) パスカル [Blaise Pascal] のことば。——「人は葦にすぎません、自然界で最も弱いものです、けれどもそれは思想する葦です。人を碎き殺すには全宇宙が、武装する必要はない、——わづかの蒸氣、一滴の水、もよく彼を

殺します。けれどもたとへ世界が人を碎いたとて、人はなほ人を殺すもの「宇宙」よりも尙いのです、といふのも

人は自分の死ぬことを、また宇宙が自分より強いことを、知つてゐる、が宇宙はこれについてなにも知らぬから。

「私らの尊嚴のすべては思想にあります。これによつて私らは高くならねばなりません、それは私らが占有できぬ時間や空間によつてではありません。そこでよく思想するやうつとめませう、——こゝにすなはち道德の原理があるのです。」【手記六三】——Blaise Pascal, *Pensées et Opuscules*, publiés par M. Léon Brunschvicg, p.188.

註(二) 「考へる葦——私は私の尊さを決して空間に求むべきではない、そうではなくて、私の思想のはたらきに求むべきである。多くの土地をもつたところで私は得をしない、——空間からいへば宇宙が私をつゝんでをる、が思想からいへば私が宇宙をつゝんでをる。」【手記一六五】——*ibid.*

——パスカルのいはゆる空間と時間とはもとより常識の考へるとほりのそれらです。もしこの兩者を私らの哲學のみるところによつてみれば、兩者は一體であつてしかも物心以前の存在である——つまりそれは思想以前のものとしての經驗である、そこで空間が私らをつゝむわけでも、思想が大宇宙をつゝむわけでも、ない。

哲學は元來思想すること——知識を愛すること——であります。その意味において人は思想するゆゑに——すなはち哲學するゆゑに、——尊い、ともいへるであります。

しかし現在の内容——時の質量——永遠性——を大きくあらせるために、非實在の時間——すなはち空間化された時間——を尊重することは、決して人を尊くするものではない。それは一反の土地、一キログラムの金銀、を尊重すると同様に、現象への執着である。といふのも、

常識のいはゆる時間は、いはゆる空間とともに、まことの時間でなく、まことの空間でないからです。

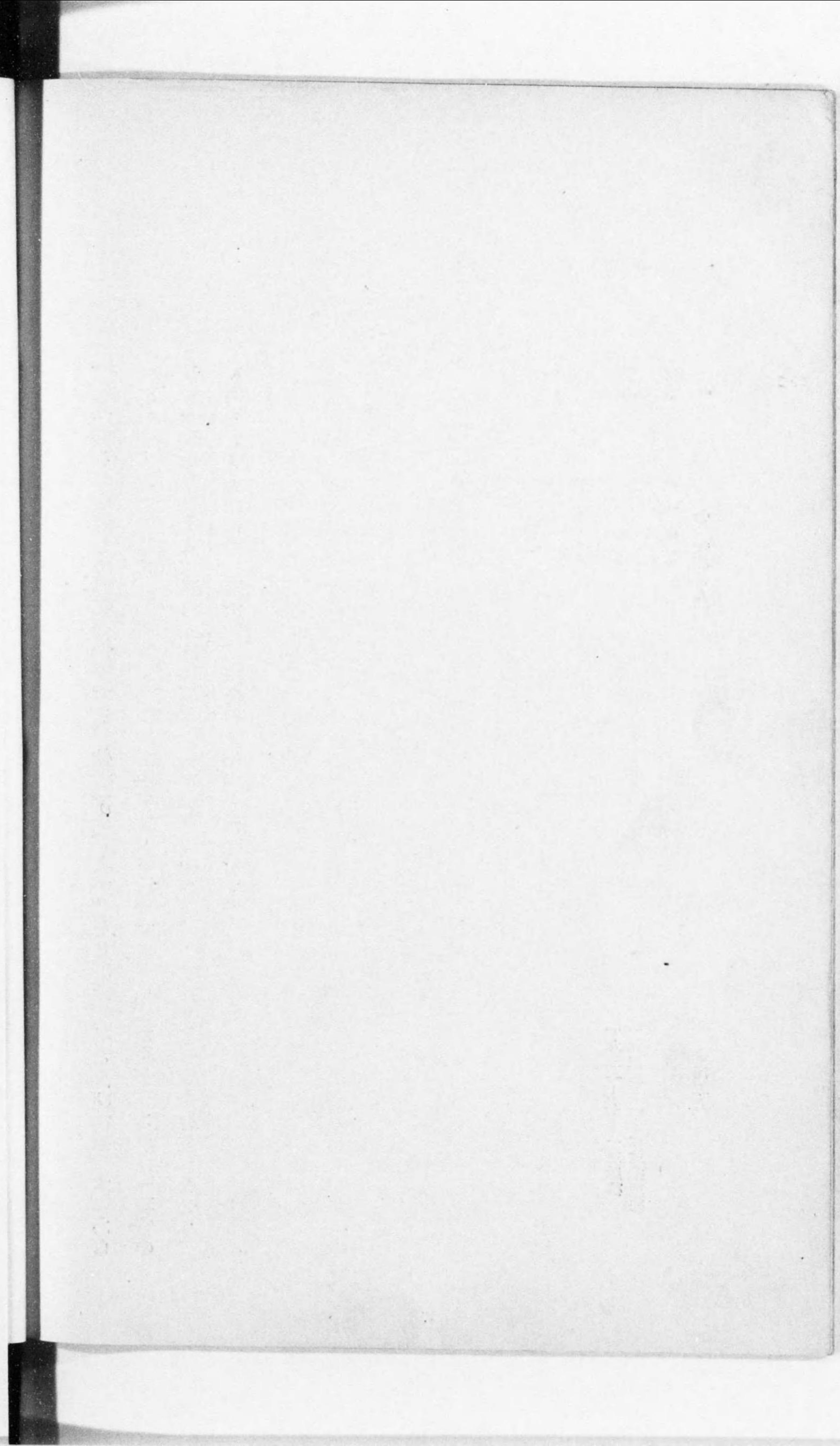
人がまことの時間に生きること——すなはちより永遠に生きること——ねがひ、まことの空間を所有しようと望むならば、たゞたゞ純粹經驗において生きるべきであります。純粹經驗は眞的時間です、同時に眞的空間です。それは根本實在としての「空間＝時間」です。

註(一) 第九章第四節所説。

愛さうとする愛——意識的愛——はすでに不純である。同様に意識しての知識の愛——意識的哲學——も不純の哲學である。そこで純粹の哲學を生きようとする人は、知識——思想——に對する故意の愛を解脱せねばならぬ。つまりまことの哲學者は哲學そのものを解脱して、ふたたび哲學のない世界——また裏がへされた平凡の世界——に、あらねばならぬ。その世界はつまり純粹經驗の生活自體です。それはたゞたゞその生命をいきてゆく世界です、そこは生活の三昧境です、一切が虚無でしかも極度に充實した世界です、すなはち動的涅槃の境地です、哲學も科學も藝術も宗教もそのほかのものもなく、しかもそれに充ちた生命の世界です。

。しかしそこは決して神祕の世界でも、仙境でも、ない。そこはたゞひとたび懷疑の水にあらはれて、ふたたびはじめの確實に歸つたありのまゝの世界です、「また裏がへされた」現實の世界です。——そこに私ら人間は、——一本の草のやうに、——たゞその生命を生きませう、死ももとより生命の一面です、生命のための一位相です。

一九三一—七—一三脱稿
一九三二—一—二五推敲終



哲學概論索引

【五十音順】

ア

アイネシデモヌ 220.
アウグスティヌス 124, 125, 127, 253f
アグリッパ 220f.
アリストテレス 10f, 12, 13, 17,
19, 37, 38, 40, 94, 99f., 103f.,
118f., 123, 124, 129, 138, 216,
242f 357, 359f., 395.
——の物理学11. ——の知識の分類
10. —— 形而上學 11. ……の目的
觀100f.
アトム(原子を見よ) 360f.
アトム論 89
アインシュタイン 23f 340, 341., 340.,
414, 427.
アナクサゴラス 74f., 92, 99f.
アキレウス 257, 356f.
ア・プリオリ (先天性) 178.
ア・プリオリテート 150f.
ア・ポステリオリ 150.
あきらか 133f.
哀傷 346.
葦 456.

イ

イドラ(幽霊) 140, 141,
インスツルメンタリズム 394f.
イデア 66f., 81, 92, 94, 99f., 112f.,
119f., 187, 196f., 359, 205.
インテリゼンス 168.
「一般知識學原論」 18.

—— 410f.
一元論 88f.
性質的—— 89f. 動的—90.
意味 238f.
意志 19, 73, 97f., 137, 309f.,
——の自由 104, 106, 109f., 114,
309f.
[意志と現識としての世界] 20.
意識 194f., 209f., 277, 236f.
[意識の直接所與] 21, 87.
意識一般 87, 255.
意慾 73.
井上哲次郎 26, 28.
因果(因果律をみよ) 107f., 110f.,
13f, 115f., 145, 146, 157, 243,
307f., 312f., 373.
因果律 95, 113f., 115f., 244, 307f.,
373.
——と蓋然率 117.
因果性 246.
印象 143f., 189.
印度哲學 71f., 95, 112f., 196, 231,
319.

ウ

ウシヤ 188.
ウインデルバント 24, 176f., 209f.,
220, 233, 245f., 356, 392, 393f.,
410, 415, 420f.
——の新理性論 176—178.
ヴォルフ 138.
ヴント 23, 28.

うたがひ 249f.
 宇宙 74, 286, 291., 452, 453., 456.
 宇宙意識 72.
 宇宙論 38, 158.
 宇宙の生きた鏡 69.

エ

エラシシ 226.
 エンペドクレス 186.
 エピクロス 45.
 エピクロス學派 12, 13, 223.
 エイドス 76f., 94, 100f., 205, 359f.
 エルサレム 24, 28.
 エロス 67, 196.
 エーテル 22, 89, 260, 342.
 エーテル波動説 22.
 エンゲル 51f.
 エレクトロン 55f., 260, 373f., 447,
 451.
 エネルギー 57f.
 エネルギー不減律 311.
 エレヤ學派 355f.
 エンピリクス 220f.
 エネルゲイア 100.
 永遠 326f., 377f., 384—385, 455f.,
 演繹法 138.

オ

オストヴァルト 52.
 「オルガノン」 124, 395, 396.
 丘淺次郎 23.

カ

ガセンディ 255.
 カウサ・スイ 97, 107, 367.
 カント 17f., 19f., 22, 40, 121, 123,
 125, 126, 128, 138, 149f., 160f.,

174, 176, 181f., 189, 198f., 212,
 235, 242, 216f., 228f., 230f., 319.,
 422, 452.

——の認識論 149—160

カルマ 112—115

「かのやうにの哲學」 172.

我 19, 71f., 82f., 108.

大——と小——115.

神 13, 70, 78, 80, 81, 82, 127, 135.,
 140, 158, 190, 250, 265f., 360.

——の人間學的證明 135.

蓋然率 117f., 317.

價值 24, 179f., 211f., 233f.

確實性 303f.

還元 212.

觀念 67, 137, 143f., 191, 218, 389,
 391, 395, 407, 417.

觀念論 184, 190—198, 231, 392,

一元的主觀的——192.

多元的半主觀的——192.

觀念相互調和説 391f.

懷疑 124, 127, 133, 218f., 249f., 458.

——のはての確實 251—259

——と知識 251.

懷疑論 214, 218—223.

「學門の進歩」 140.

「學門の權威と進歩」 141.

科學(自然科學を見よ)
 140, 437.

感覺 189.

感性 139, 155, 245.

外的感官(外官) 142, 159.

諧調 401f., 417f., 425f., 433f., 437f.,
 439f.

關係 143, 157, 163f., 242, 243, 245.
 哲學的——146.

キ

キケロ(シセロ) 12.
 キュルペ 27, 28.
 キリシヤの哲學 5f.
 キリスト教 102, 361.
 幾何學 2f., 155. ユークリットの
 ——と非ユークリットの——2f.
 機械觀 96—97, 316.
 歸納法 138, 140f.
 記憶 144.
 客觀性(對象性) 303f., 318f., 416, 423.
 客觀(非我を見よ) 88, 174, 218f.,
 229—241, 271f., 280, 294f.
 客觀世界 294f., 301f.
 究極者 264.
 究極實在(根本實在を見よ) 320f.
 「教育改造の原理」 329.
 虛偽(誤謬を見よ)
 虛數 407.

ク

クリスチアンゼン 235.
 空間 145f., 154f., 159, 246, 318f.,
 331f., 336, 457f.
 客觀的—— 331, 333.
 實在としての—— 331.
 ——はつまり私等の經驗 333—
 336.
 空間=時間 337—345, 366, 458.
 空時(空間=時間を見よ)
 空間性 245.
 桑木嚴翼 26, 28, 74, 159.
 (はしがき三)
 ケ
 ゲルテン 178.

經驗 159, 160., 164f., 167f., 171f.,
 175, 183, 200, 201f., 224, 228,
 261f., 285f., 296f., 301f., 318f.,
 333f., 397f., 407, 417f., 425f., 432f.,
 447.
 ——の學としての哲學 14f.
 ——と理性 16f.
 純粹——(その項をみよ)
 徹底した舊——148.
 經驗統體 269f., 277f., 287f., 318f.,
 經驗論 14f., 131, 139—149, 160f.,
 399f., 448.
 經驗論者 119f.
 經驗論と實在論と觀公論との關係
 188f.
 藝術的眞理 430.
 形相 76f.
 形素因 101.
 形而上學 11, 38f., 118f., 132, 164.
 ——の分野 41.
 ——諸論 42—122.
 理性論的——118f., 132.
 經驗論的——118f., 132, 165.
 ——と認識論 126f.
 ——と認識論 182
 「形而上學序論」 87.
 形而上の世界 116
 形而下の世界 116
 原子 144f., 54f., 117, 120, 372,
 原子説(原子論) 22, 44f., 92, 115,
 204f.
 ラザフォードの——55f.
 ボーアの——59f.
 最近の——60f.
 ド・ブロイイの極最近の——61f.
 ——とモナド 68f.

現象 24f., 95f., 212.
 現象界 110, 312, 313.
 現象世界 196, 307.
 現象論 185, 198—201.
 現象學 212, 238f.
 現象と實在 24—37, 98.
 現象即實在說 94—95.
 現實 26, 440f., 449f.
 現在 326f.
 —の永遠性 326f. 384—385.
 現實世界 442—446.
 現識 243.
 原因自體 80f., 97, 103, 107, 369.
 原始の素材 76f.
 原始の形相 76.
 原罪說 125.
 繼續 104.
 「繼續と同時」 89, 342, 344.
 元素 37, 44, 187.
 決定論 114, 373, 385f.

コ

コペルニクスの轉廻 230, 452.
 コント 53, 225f., 228f.
 コーヘン 179f.
 心(精神) 64f., 78f., 82, 194f., 250.
 心的存在 297f.
 心と物 230f., 296—300.
 根(リトマタ) 186f.
 根本經驗論 25, 122.
 「根本經驗論」 25, 165f., 299.
 根本實在 127, 249f., 320f., 336.
 昆蟲の知識 440f.
 後來觀念 136.
 後天的 150.
 後天主義 176.

誤謬 136f., 400f.
 悟性 139, 155, 159, 199, 243.
 洪範九疇 241.
 幸福 219.
 孔子 327.
 「古今」 351.
 恒常 377f.

サ

サンセズ 222.
 三昧境 33, 73, 458.
 三態法 225f.
 「懺悔錄」 125.
 催眠術 299.
 最高善 429.
 相對性 435f.

シ

シタリス 441.
 シラァ 162, 166, 175.
 シゼロ(キケロを見よ)
 シュレーディングル 61, 374.
 シェリング 19, 196, 232, 360.
 ショーペンハウエル 19, 73, 309, 243.*
 —の唯心論 73.
 —の解脫法 73.
 ジメル 162, 183.
 死 287f.
 四大說 44, 92.
 四元素 37, 44, 254.
 四根 186f.
 四次元 324, 339f.
 自然 37i., 83, 140, 169.
 自然科學 53f.
 —と唯物論 53f.
 自然の光明(自らなる光明) 136,

138.
 自然の齊一律 311.
 「自然の體系」 47.
 自我 19, 71f., 82f., 108, 133f., 231f.,
 250, 252f., 261f., 265f., 276f.,
 282f., 294f., 303f., 316f., 337,
 360, 451f.
 —の複數 278, 282—287.
 —の壞滅 287—239.
 —即世界(非我) 280, 294—296.
 自我の構成 265f.
 「自然と經驗」 168.
 自由 95f., 105f., 110, 307f., 312f.,
 451.
 意志の—108f.
 自由論者 108.
 自由意志 104, 106, 109f., 114.
 思惟 245.
 思想 456.
 指向的關係 240.
 時間 86f., 89, 104, 109f., 145f., 154f.,
 159, 242, 246., 457f., 318f., 336,
 365.
 宇宙的—89.
 —の豐滿性 322—326.
 過去と未來の非實在性 322f.
 眞的—と客觀的—330—331.
 時間性 245.
 事實 412f.
 事實判斷 421f.
 資料論理學 129.
 持續(純粹持續をみよ) 109f.
 眞理 134, 142, 166, 377f., 387—
 438, 439f.
 —の容量 431.
 超越的—388f.

內在的—390f.
 —の標準 392f., 401, 425f.
 新カント派の—觀 392f.
 プラグマティズムの—觀 394f.
 —と純粹經驗 397f.
 —と虚偽 400f.
 絶對—400f.
 通常經驗の—402f.
 科學的—403f.
 數學的—404f.
 $\sqrt{-1}$ —406f.
 哲學的—412f.
 —とその場 431f., 425—433.
 —と判斷 415f.
 —の普遍妥等性 420f.
 藝術的—430f.
 道德的—429f.
 —は動的 433—435.
 —の相對性 435—437.
 —と知識 437f.
 —の相互依存性 436.
 眞の時間 21, 122.
 新プラトン學派 68.
 新觀念論 208—213.
 「新オルガノン」 125, 140.
 新カント學派 25, 74, 87f., 126, 161,
 179f., 209f., 233f., 247, 396, 397f.,
 415f., 420f.
 新實在論 201—208.
 新經驗論 160—175.
 新理性論 175—181.
 心的存在 297f.
 心理世界 298, 305, 308, 312.
 神學 13f., 158.
 人本主義 452f.
 質 146, 157.

實證論 223—227, 228f.
 實證哲學 225f.
 「實證哲學論」 225.
 實在 43, 84, 109, 123, 183, 185f.,
 316, 364f., 367.
 —の學 19.
 現象と—34f.
 根本—320f.
 實在界 110, 196, 307, 312, 314.
 實在論 79f., 184, 185—190, 194f.,
 201f., 231.
 實體 143, 242.
 實用主義(プラグマティズムを見よ)こ
 の譯語の不適當 166.
 主觀(自我をみよ) 58, 174, 192,
 218f., 229—241, 271f., 276, 280,
 285, 294f., 39f.
 主觀論 218f.
 主意的唯心論 74.
 主知的唯心論 74.
 主辭 258.
 種子 75.
 「種の起原」 175.
 宿命説(決定論を見よ) 95, 105f.,
 114, 316.
 受動 242.
 純粹經驗 20f., 84f., 128f., 164f., 171,
 207f., 265f., 286f., 296f., 312f.,
 317f., 321f., 330, 337, 344f., 376f.,
 397f., 425f., 432f., 439, 450f.,
 458.
 純粹持續 86f., 89, 128, 183, 267,
 330, 331, 365.
 純粹意識 127, 183, 238.
 「純粹理性批判」 20, 125, 150, 155,
 159.

「純粹認識の論理學」 180.
 「純粹現象學及現象學的哲學理念」 22.
 純粹認識 126.
 小我 283f., 288f., 294f., 302, 303f.
 狀位(場) 403f., 413f., 425—433.
 狀態 242.
 生滅々已寂滅爲樂 363.
 諸行無常是生滅法 362.
 充則理由の原理 244, 245.
 釋迦 362f.
 社會法 225.

ス

スピノザ 16, 102, 121, 138, 149,
 190, 216f., 388.
 スペルマタ 75.
 數學 155.

セ

ゼームス(チェイムズをみよ)
 セリング(シェリングをみよ) 82,
 83, 89, 244.
 先天主義 176.
 先天的 150.
 先決問題許容 293, 334.
 先驗的感性論 155.
 先驗的分析論 155.
 先驗的觀念論 198—201, 209.
 絶對 19, 82f.
 絶對眞理 400f., 432, 435.
 絶對虚偽 401, 435.
 世界 74, 158, 250, 282, 294f., 303f.,
 306, 309, 313f., 439f., 442f., 453f.
 世界精神 82.
 性理學 4.
 西南學派(バーデン學派) 415.

精神(心をみよ) 大—72f.
 「精神の現象論」 19.
 「精神科學概論」 163.
 「精神科學派」 172f.
 精神界(心理世界をみよ) 345.
 聖學 4.
 聖婆伽梵歌 72.
 「生命の輪廻」 49.
 生命, 生活 122, 164, 168f., 172f.,
 288f., 437f., 439, 446—449, 454,
 (はしがき—)
 生哲學派 172f.
 性質 242, 245.
 性質復合體 208.
 責任 310.
 靜 349—364, 365, 375, 381f.
 動的—375f.
 —は現象界にだけある 370f.
 —は動の貯藏 372.
 靜(的見地と動的見地) 352—364.
 靜的世界 381f.

ソ

ソロン 7.
 クソクラテス 8, 74.
 ソフィステス 8.
 ソレン 392.
 それ 236, 259f., 265, 271f., 276f.,
 290f., 298f., 315, 336, 364, 366,
 367, 398f., 401.
 想像 145.
 相對論(相對性理論 相對性原理) 23,
 116.
 素材 76f.
 素材因 101.
 素朴的實在論 186, 392.

存在は知覺だ 94, 192.
 存在 247.
 莊周 253.
 「創造的進化」 441.

タ

タレス 6, 9, 89.
 —の原水説 65.
 ダーウソ 48, 52, 174.
 大我 283f., 288f., 294f., 303f.
 妥當 178, 247.
 妥當性(普遍妥當性をみよ) 178,
 310, 416, 431f.
 體驗 172f., 265f.
 單子(モナド) 69.
 物質的—117.
 「多元的宇宙」 85.
 多元論 91f.
 數量的—91.
 性質的—91f.
 動的—92.
 靜的—92.
 單純觀念 142f., 144.
 單純印象 144.
 對象 179, 190, 191, 200, 209f., 233f.,
 236, 392.
 題材 169.
 代悲白頭翁 347.

チ

チェイムズ 20, 25, 83f., 92, 94, 119,
 122, 162, 163f., 167, 175, 202,
 205, 207, 235f., 299, 360, 394f.,
 417.
 —の新經驗論 163—166.
 知覺 143f., 220f., 391f.

知識(認識眞理をみよ) 4f., 141f.,
146f., 148f., 164f., 172, 173,
178, 191, 195, 249f., 263f., 277,
437—438, 439f.
—の蓋然性 146.
—の愛(哲學 6f., 12.
—を愛する者(哲學者)7f.
—一般9f.
—のアリストテレスにおける分類
10.
愛された—12.
神聖—13f.
世俗の—13f.
—の科學としての哲學 17.
—の根源 131f.
—の限界 214f.
知識と懷疑 251f.
知識哲學(認識論)知識論をみよ
知識論(認識論をみよ) 17f., 40f.
知的愛 67.
知識の階級的分類 226.
智性 168.
中世哲學 13f.
中性的一元論 206.
力 250.
「力と物質」 49.
超物心的實在論 79—88.
超越説 94f., 388f.
超越的眞理 388f.
直接經驗 167.
千代 420.
ツ
ツェノン 257, 355f.
テ

テアイテトス 9.
ディルタイ 172f., 183, 361.
—の生哲學 172f.
デカルト 16, 121, 125, 127, 132f.,
141, 148, 149, 150, 182, 189f.,
212, 216f., 253f., 259f., 290f.
—の物心二元論 78f., 102, 128.
デモクリトス 44, 74, 119f.
デューイ 99, 162, 163, 166, 171f.,
201, 235, 237f., 332, 394f., 417,
425f.
—の新經驗論 166—170.
「デューイ教育學說の研究」 99.
「デューイ論理學說の研究」 170, 395,
396, 417, 426.
「デューイ哲學說の研究」 168, 170.
デュナミス 100.
哲學
—は何か 1—33.
—の定義 1—33.
—といふ言葉 4—6.
—すなはちソフィアのフィリア 6—9.
—すなはち知識一般 9—12, 442f.
—即生活の指導者 12.
—即世俗の知識 13—14.
—即經驗の學 14—15.
—即理性の學 15—16.
—即知識の科學 17—18.
—即實在の學 19—22.
—即一般原理の學 22—23.
—即世界觀人生觀 24—25.
—と人間 456—459.
—の綜合的定義 25—27.
—と生活 27—33.
—の極地 33.
—と宗教, 藝術, 道德 33.

—の追究と“青い鳥” 33.
—と科學 62f.
—と現實世界 442—446.
—と生活 446—449, 448.
—は“また裏返した世界,” 445.
文化となつた—454.
哲學者(フィロソフォスをみよ)
32f., 444, 445, 449.
—と凡人 446.
「哲學史教科書」 220.
「哲學青年」 341.
「哲學概論」(桑木) 26, 74, 159.
(ウインデルバント) 209.
「哲學の體系」 179.
「哲學の問題」 206.
「哲學と文藝」 329, 341, 343, 353.
「哲學の論理および範疇の論」 246.
哲學的關係 146f., 159.
哲學的眞理 412.
定義の困難 1f.
定業説 108.
電子(電子論をみよ) 372f.
電子論 55f., 115f., 117.
—と因果の法則 115—118.
帝釋天 362f.
ト
トオランド 46.
ド・ブロイイ 61, 374f.
所 242.
時 242.
道具主義 395
「東洋哲學物語」 72, 115.
同一 83, 146, 147.
當爲 234, 392, 422, 431.
道德的眞理 429.

「道德科學概論」 163.
動(變化を見よ) 346—386, 434f.
—と文學 346f.
—と現代生活 383—384.
動自體 367.
動的根本原理 367—386.
—と永遠の現在 384—385.
—と生活態度 381—384.
—と目的論及決定論 385—386.
動力因 101.
動的見地と靜の見地 352—364.
獨斷論 138, 214, 216—217, 223,
231.
「淘汰説と認識論の關係について」175.
土居光知 351.
「杜氏五大講演」 332.
「唐詩選」 347, 420.

ナ

ナトルプ 181.
なに 236, 297, 315, 366,
ながれ(流動, 變化等をみよ) 315.
內的感官(内官) 142, 159.
内在説 94f., 390f.
内在的目的觀 103f.
内在的眞理 390f.
內的經驗 124, 255, 331.
内容論理學 129.

ニ

ニュートン 377, 414, 434.
二元論 91f., 207.
靜的—91.
動的—91.
「認識の二つの途」 211.
「認識の對象」 179, 233, 234, 235.

認識論 40f., 123—247, 250.

——と形而上學 182.

——と論理學 129.

——の分野 130f.

「認識の形而上學原論」 128.

人間 280, 443f., 447f., 451—459.

「人間機械論」 47.

「人間性論」 145, 188, 243.

「人間知識の諸原理に關する論文」
192.

西周 4f.

ヌ

ヌース 75, 92, 99, 183.

ネ

涅槃 73, 364, 376, 458.

「涅槃經」 361.

ノ

ノエシス 239f.

ノエマ 239f.

能動 242.

後の幾何學 2f., 427f., 434.

ハ

ハイネ 378, 419.

ハイデゲル 21, 84.

ハイゼンベルク 61, 117, 374.

一の不確實性 117.

ハルトマン(E.) 83, 244.

ハルトマン(N.) 128.

バルメニデス 355f., 359.

バウルゼン 23.

バスカル 456f.

バーデン學派 25, 123, 161, 176f.,
179f., 209f., 232f., 247.

パークリ 94, 121, 143, 148, 188.

192, 197, 202, 217.

はつきり 133f.

はたらき 195f., 237, 313, 315, 374,
396.

はたらき一般 313.

反省 149, 189.

萬象 271.

萬有 277, 447, 453f.

波動 373f.

波動説 61, 116, 117.

判断 151f., 177, 179, 415, 421.

事實——179.

價值——179.

——の種類 151.

——の諸形式 155.

分析的先天的——151f.

綜合的先天的——153f.

分析的後天的——152.

綜合的後天的——152f.

判断作用 177.

範疇 156f., 199f., 241—247.

「範疇論」 244.

「範疇の體系」 245.

場所 242.

場(狀位) 403f., 413f., 425—433.

場自體 432.

排中の原理 245.

ヒ

ヒューマニズム 166.

ヒュレー 76f.

ヒューム 15, 17, 40, 125, 126, 14,
3f., 159, 162, 163, 188f., 217,
222, 223f., 230, 243.

ピタゴラス 66, 241f., 405.

ピルロン 219f.

「ピルロン主義概説」 221—222.

ピロニズム 220.

ピュヒネル 49, 50, 51.

非ユークリットの幾何學 2f., 414,
427f.

非我 71, 276f., 295f., 305.

斐魯蘇非 4.

火(四元素をみよ) 354f.

非宿命論 95, 105f.

批判論 131, 149—160, 198f., 214,
228—229.

批判的實在論 201—208.

批判哲學 178.

賓辭 258.

「百一新論」 4.

表象 389f.

必然性 392.

美的眞理 430.

フ

フセル 21, 122, 172, 182, 212f., 23
8f., 276.

プリオリテート(先始性) 177.

フィルム 440, 443, 446f.

プラトン 9, 10, 12, 13, 37, 66, 92,
94, 112, 118f., 196, 204, 216,
359.

フィロソフォス 7, 12, 36.

フィロソフィア 6, 7, 11, 12.

フィヒテ 18f., 71, 82f., 89, 194f.,
198f., 231f., 238, 360.

ファウスト(はしがき1)

フック 46.

フォイエルバッハ 48—53.

フォクト 49.

プロティヌス 68.

プラグマティズム 20, 123, 161, 16
5f., 394, 397f., 416f., 422.

ファイヒンゲル 21, 162, 175.

プロタゴラス 119.

プロバビリテイ 117f.

プロトン 55f., 99f., 260, 357, 373f.

プランク 57.

物理學 11, 155.

純粹——の可能 155.

物理論(物理學) 37f.

物自體 19, 158, 159, 200f., 231.

物心二元論 74—79.

物(物質) 78f., 250.

物質 43f., 78f.

「物體信仰と化學」 49.

物理世界 116f.

物質界(物理世界をみよ) 298, 305,
308, 312.

物質的單子 117, 373.

不可不 422.

不許不 234, 392, 422, 431.

不知の原因(不明の原因) 145, 148,
189, 224.

不立文字者 259—264.

複合觀念 142f., 144.

分岐路的立場 395.

分子 117.

分量 242.

文化 169, 173, 454.

文化科學派 172f.

文學的眞理 432.

「文學序説」 351.

普遍者 206.

普遍妥當性 392, 404, 410f., 416,
420—425, 425f., 430f.

—の廣さと高さ 430f.
 複寫說 389f.
 附屬 242.
 佛教 361.
 藤村操 335.

へ

ペリ 166.
 ヘーゲル 19, 48, 53, 82, 89, 100, 1
 96f., 244, 360f.
 ヘッケル 52.
 ヘロドトス 7.
 ヘラクレイトス 7, 9, 89, 90, 112,
 353f., 360f.
 バイコン(ローヂャ) 14, 139,
 148, 395.
 バイコン(フランシス) 15f., 102, 1
 24, 139f.
 ベルグソン 20f., 83f., 89, 90, 94, 1
 04, 109f., 122, 127, 128, 162, 16
 3, 167, 170f., 182, 183, 202, 23
 8, 267, 319f., 330, 331f., 333f.,
 337, 341f., 360, 365, 441.
 一の新經驗論 170—172.
 變化 266f., 311, 377—380.
 辯證法 197.
 標價判斷 421.

ホ

ホッブス 46.
 ホルバッハ 47.
 ボーア 59f.
 梵 72f.
 本質 208.
 本體論 39.
 本有觀念 136.

本質(實體) 145.
 本能 438, 440f.
 方法 169.
 「方法論」 16.
 放射說 61, 116, 117, 373f.
 法則 296, 306—317, 312, 377—38
 0, 450.
 「方丈記」 351.

マ

マルクス 51f., 53.
 マールブルク學派 123, 126, 128,
 161, 176, 179f.
 まことの時間(眞の時間) 21, 122.
 「萬葉」 351.

ミ

ミル 129.
 ミンコヴスキー 344.
 「民族心理學」 23.

ム

無 266, 360.
 無知 127, 219, 250f.
 無常 340f., 350f., 353f., 362f.,
 381f., 454f.
 矛盾への論理 356.
 矛盾の原理 245.

メ

メフィストフェレス(はしがき)
 命題 421f.

モ

モナド 68f., 190, 360.
 「モナド論」 17, 70, 89, 91.

モーレシヨト 49.
 モンテニユ 222.
 物 78f., 250.
 物自體 19, 158, 159.
 目的 95f., 97f., 450.
 目的觀 97—104, 105f., 316, 385f.
 機械觀と—との差異 98.
 超越的—98.
 内在的—98.
 目的因 101.
 問題 395, 400.

ユ

ユーベルウエヒ 22, 51.
 ユークリッド 326, 337, 377, 414,
 427f.
 —の幾何學 415, 434.
 幽靈(イドラ) 141.
 唯物論 42—63, 392.
 辯證法的—52f.
 自然科學と—53f.
 近世の—46.
 17世紀の英國の—46.
 18世紀の佛國の—47.
 19世紀の獨國の—48.
 「唯物論は眞理か」 42, 118, 317.
 唯心論 64—74, 184, 231.
 唯我論 192f., 282f., 290f., 304f.,
 451f.

ヨ

様相 81, 143, 157.

ラ

ライブニツ 16, 89, 102, 121, 13
 8, 148, 149, 190, 216f., 360, 388.

ラメトリ 47, 63.
 ラザフォード 55.
 ラセル 204f., 373f.
 ラスク 246.
 ライフ 172, 173.

リ

リーマン 427.
 リケルト 179, 211, 233f., 238, 245,
 246, 415, 420f.
 流動(變化流轉等をみよ) 313.
 量 146, 156f.
 「利學」 4, 5.
 量子 260.
 量子說 57f.
 李白 420.
 理想主義 184, 392, 449.
 理學 4.
 理解 173.
 理想 26, 449f.
 理性 136, 139, 159, 160, 168, 170,
 175, 183, 228.
 —の學としての哲學 15f.
 理性論 15f., 131—139, 161f.
 理性論者 119f.
 輪廻 49, 112f.
 「倫理學」 138, 310.

ル

ルネサンス 123.
 $\sqrt{-1}$ 406.
 類似 145, 146.
 流轉(變化をみよ) 315, 381f.

レ

レウキッポス 44.

レヴィアタン 47.
 レーベン 122, 172f., 183.
 レコード 440, 443, 446f.
 聯合力 145.
 歴史 169, 173.

ロ

ロバヂェヴスキ 427.
 ロック 15, 40, 126, 141f., 148, 149, 159, 201.
 「ロマンティックより現在までの哲學史」 22.
 ロツエ 423, 426.
 ログス 183.
 ローレンツ 343.
 「論理學概論」 96, 280, 377, 437.
 「論理的研究」 22, 127.
 論理的原子論 204f.

ワ

「私の哲學の組織」 20.
 我(自我、大我、梵、をみよ) 22, 252f.
 我[私]は思ふ、だから我はある 16, 133, 245, 255.

索引二

[A B C 順]

A

Absent 323
 Absolute, das 83
Advancement of Learning 141
Adversus Mathematicos 222
 Agrippa 221
 Aham 73
 Allgemeingültigkeit 392
 Anselmus 135
 aposteriorismus 178
 apriorismus 178
 Augustinus 124, 125, 254

B

Bacon, Roger 14 f.
 ———, Francis 15 f.
 Bergson 21, 172
 Berkeley 95, 143 f.
 Beurteilung 421
 Besondere Wirklichkeit 178
 Bewusstsein 74, 194, 232
 Bewusstsein überhaupt 74
 Bhagavad Gita 73
 Börne 379
 Brahmann 72
 Bruno 70
 Büchner 51
Buch der Lieder 420
 Burnet 8, 44, 356 f., 420
 Bywater 353

C

category 241
 causa sui 81
 cause de soi 81
 ce qui est 359
 character complex 208
 Christiansen 235
 Cicero 12
 clair 134
 clear 134
 cogitare 261
 cogitatio 82
 Cohen 180
 cogito ergo sum 16, 133, 245, 257
 Coleridge 119
 Comte 225
 Comtisme 225
 concordia 401
Confessions 125
Contemporary British philosophy 206
 corpuscule 117, 373, 375
 cosmology 38
Creative Intelligence 238
 crinkles 374
 critical realism 203
 criticism 215

D

Darstellung meines Systems der Philosophie 20

Darwin 175
De Civitate 125
 De Broglie 61, 116, 373, 374
De Dignitate et Augmentis Scientiarum
 141
Democracy and Education 99, 174
 Descartes, 15 f
 des lois de probabilité 118
 déterminisme causal 373
Déterminisme et causalité dans la
physique contemporaine 116, 373
 determinisme 105, 114
 Dewey 99, 162
 Diels 420
 Dilthey 162, 173
 dilucide 134
 Ding an sich 19, 159, 201
 distincte (distinct) 234
Discours de la méthode 16, 255
 dogmatism, Dogmatismus 215
 Drake 208
Durée et simultanéité 89, 341
 durée pure 87

E

Early Greek Philosophy 44, 356 f
Einleitung in die Moralwissenschaft
 163
Einleitung in die Philosophie Wundt
 22, Paulsen 23, Windelband 178,
 179, 210, 422, 423
Einführung in die Metaphysik 87, 172
Einleitung in die Geisteswissenschaften
 163
 Engels 53
 epistemology 40

esse est percipi 95, 143
 Erkenntnistheorie 40
 Erleben 174
 Erlebnis 174
Essai sur les données immédiates de
la conscience 21, 358
Essays Concerning Human Under-
standing 15, 110
Essays in Radical Empiricism 165
Essays in Critical Realism 208
Essais 223
Ethica (Éthique) 17, 81, 82
 Ettlenger 22, 173
 Eucken 173
 events 374
 extensio 82
 existence 204
Experimental Logic 162, 395

F

fact ce 40
 fatalism 108
 Feuerbach 51
 Fichte 18
 filling space 359
 forkd-road situation 396
 freedom from passion 220

G

Gegenstand der Erkenntnis. Der
 179, 234.
 gelt.n 178, 413.
 geometry 405.
Geschichte der Philosophie von der
Romantik bis zur Gegenwart 22, 173
Geschichte der Philosophie 25, 359.

Geschichte der Materialismus 52
Grundzügen einer Metaphysik der
Erkenntnis 129
Grundzüge der gesamten Wissen-
schaftslehre 18
Grundsätzen der Philosophie der
Zukunft 51

H

Haeckel 52
Hamlet 420
 harmonia 401
 Hartmann, Edward von 84, 245
 Hartmann, Nicolai 128
Harzreise (Die) 378
 Hegel 19, 184
 Heidegger 22
 Heine 420
 Heisenberg 61, 373
 Herakleitos 249
hiérarchie des sciences, La 227
 Hobbes 47
 Holt 204
 homo noumenon 109
 Hooke 47
 Humanism 452
 Hume 15
 Husserl 22, 126, 128, 184, 213

I

i 409
 Ich, das 71
 idea 417
 ideae adventiciae 136
 ideae innatae (innate ideas) 136
 ideas 145

Ideea zur einer reinen Phaenomeno-
logie und Phaenomenologischen
Philosophie 22
 idealism, Idealismus. 184
 idola 141
 imaginary number 407 f
 immediate experience 168
 impressions and ideas 145
 incertitude d' Heisenberg 118
 indeterminism 105
Influence of Darwin on Philosophy
and Other Essays 168
 instrumentalism 395
 intelligence 240
 intention 240

J

James, W., 21, 119.
 Je pense, donc je suis 133, 245, 258
 Jerusalem, 25, 166

K

Kant, 18, 185
Kapital 53
 Karma 113
 Kategorie 241
Kategorien-lehre 245
Koehlerglaube und Wissenschaft 51
Kraft und Stoff 51
Kreislauf des Lebens 51
Kritik der Kantischen Erkenntnislehre
 235
Kritik der reinen Vernunft 126, 158
 Kritizismus 215
 Külpe, Oswald 8, 27

L

Lange 52
 Lask 247
 La Mettrie 48, 63
 Leben 173
 Leibniz 16, 17, 70
 l'espace-temps 337-345
Leviathan 47
L'évolution créatrice 333, 441
L'homme machine 48, 63
 Lipps 173
 Lobatschewski 3
 logical atomism 206
 Logik (logic) 41
Logik der Philosophie und Kategorienlehre 247
Logik der reinen Erkenntnis 180
Logische Untersuchungen 22
 Lotze 178
 Lovejoy 208
 lumen naturale 136

M

Manner 146
 Marx 53
 Marvin 204
 materialism 43
 meaning 417
Méditation 255
 melodia 401
 mens 75
 metaphysica 38
 method 170
 Mill, J. Stuart, 5
 Minkowski 340
 modes 145

modus 82
 Moleschott 51
 monade 70
 monadologie 17, 70
 Montague 204
 Motaigne 222
 müssen 422

N

naive realism 186
 nature 141
Nature and Experience 170
 new realism 202
New Realism, The 204
 Nicht-Ich 71, 83
 Nietzsche 173
 Nirvana 74
 noema 74, 276
 noesis 75, 276
 Notwendigkeit 392
Novum Organum, 15, 125 141

O

object
On the origin of Species 175
 ontology 39
Organum 395
 Ostwart 53
 ousia, 242
Outline of Philosophy, An 206, 374
 375

P

Palhoriès 227
 Parmenides 44
 Paramamantan 73
 Pascal 456
 paschein 242

Paulsen, 23
Pensées et opuscules 457
 Perry 204
 petitio principii 45
 Phaenomenologie 184
 phenomenalism, Phaenomenalismus 184
Phaenomenologie des Geistes 19
Phenomenology 126, 128, 213
 philosophy, Philosophie 5
Philosophie der Freiheit 83
Philosophie des Unbewussten 84, 245
Philosophie positive 225
 physica 37
 physis 37
 piece of matter, a 374, 375
 Pitkin 204
Pluralistic Universe, A 85
 poiein 242
 poison 242
 poson 242
 pote 242
 pou 242
Pour l'histoire de la science hellène 357
 positivism, Positivismus 215
 positivisme 225
Praeludien 421
Pragmatism 21
 Pratt 208
 Present 323
Principes de la philosophie, Les 134
Problems of Philosophy, The 206
 principium rationis sufficientis 244
 pros ti 242
 pregnant presence 326

Pythagoras 405
 Pyrrhon 219
 pyrrhonism 222

R

Radical Empiricism 21, 85
 Raum-Zeit 340, 341
 realism, Realismus 184
 reductio ad absurdum 356
 reduction 213
 relations 145
 res cogitans 79
 res extensa 79
Revue de Métaphysique et de Morale 116 373
 Rickert 171, 211
 Riemann 3
 Rogers 208
 Russel 206

S

Sanchez 223
 Santayana 208
 Schelling 20
 Schiller 162
 Schopenhauer, 20
 Schrödinger 61, 373
 scepticism, Skeptizismus 215
 scientia est potentia 141
 Seiende, das 357
 Sein 194, 282
 Sellers 208
 Sextus Empiricus 222
 Spinoza, 16, 17
 Sollen 234, 422
Some Problems of Philosophy 119, 165
 Simmel 162, 174

sensation 159
 Sinnlichkeit 139, 159
 situation 425 f
 space-time point 374
 Spaulding 204
 Strong 208
 subject (subject) 259 229
 subject-matter 170
 summum bonum 430
 subsistence 204
 substance 103
 substances 145, 374
 substances simples 70
Système de la nature 49
 systems of events 374
System der Philosophie 179

T

tabula rasa 142
ta meta ta physica 38
 Tannery, P. 357
 teleology 99
 Timon 221
 Toland, 47, 63
 transzendente Idealismus 198
Treatise of Human Nature, A, 15, 125 190
Treatise on the Principles of Human Knowledge 143
 tropes 222
 truth 440

U

Ueber die Beziehung der Selektionslehre zur Erkenntnistheorie 175
 Ueberweg, 23
 understanding 159

unknown causes 146, 190
 un libre arbitre de la nature 118
 Urteil 421
Utilitarianism 5

V

Vaihinger, 21
 validation 395
 verifiability 395
 verification 395
 Vérité 440
 Veritas 440
 Verstand 159
 Verstehen 174
Vies et doctrines des grands philosophes 227
 vis viva 103
 Vogt 51
Vom System der Kategorien 246
 Volkerpsychologie 23

W

Was ist Metaphysik? 22
 Wechsel 379
Welt als Wille und Vorstellung, Die 20
Weltraetsel 52
 Weltgeist 83
 Wert 234
 what is 359
 Wille 73
 Windelband, 25, 178, 179, 210, 359
 Wundt, 23, 173

Y

Zur Kritik der Hegelschen Philosophie 51
Zwei Wege zur Erkenntnistheorie 211

索引三

[α β γ 順]

A

Αἰνησιδῆμος 221
 Ἀναξαγόρας 75
 Ἀριστοτέλης 11
 ἀταραξία 220
 ἄτομος 45

B

βίος 420
 βίός 420

Δ

Δημόκριτος 44

E

εἶδος 77
 εἶναι 359
 Ἐπίκουρος 45
 ἔρωσ 67

H

Ἡράκλειτος 8
 Ἡρόδοτος 8

Θ

Θαλῆς 8
 Θεαίτητος 10

I

ἰδέα 67

K

κατηγορία 241

Λ

Λεύκιππος 45

M

μη εἶναι 359
 μοῖρα 490
 μονάς 70
 μόρος 420

N

νόημα 240
 νόσις 240
 νόσις νοήσεως 77
 νοῦς 75

O

Ὄργανον 125

Π

Πλάτων, 10
 Πλωτίνος 68
 πολυμαθία 249
 πρώτων κινῶν
 Πυρρώνων 220
 Πυρρώνειοι λόγοι 221
 Πυρρώνειοι ὑποτυπώσεις 222

Σ

σπέρματα 75

Σωκράτης 8

Τ

τὰ μετὰ τὰ φυσικά 39

τέχνη, 11

τὸ ἐόν 359

τὸ μὴ ἐόν 359

τὸ πλεόν 359

τρόποι 222

Τ

ἕλη

Φ

φύσις 37. 141

φιλοσοφῶν 8

φιλοσοφία 6

φιλόσοφος 8

昭和七年四月十五日印刷
昭和七年四月二十七日發行

版權
所有

發兌

東京市芝區愛宕下町
四丁目四十四番地

哲學概論

定價金 參圓

著者 永野芳夫

發行者 山本三生

東京市芝區愛宕下町四丁目四十四番地

印刷者 杉山愛二

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

改

造

社

振替東京
電話芝(43)
八
四
二〇
二二
四三二二
番番番番番

(長谷部製本)

株式會社秀英印刷

~~612~~
~~119~~

101
N16

終